

菊水町文化財調査報告 第5集

赤穂原



1 9 8 3

菊水町教育委員会

菊水町文化財調査報告 第5集

赤 穂 原

1 9 8 3

菊水町教育委員会

序 文

菊水町教育委員会では、昭和57年度国庫補助事業として、赤穂原台地を中心とする埋蔵文化財発掘調査を実施致しました。当台地は、昭和47年～48年に構造改善事業が行われ、今では台地一帯に西瓜栽培のビニールハウス群が連なっています。今回の調査目的のひとつに、赤穂原台地における包含層の有無の確認がありました。その結果は本文にあります通り、良好な包含層はほとんど無いようです。しかし、台地の縁辺には、まだ未発見の箱式石棺等が残っている可能性もあります。いずれにせよ、赤穂原台地を含む菊水町東北部からは、旧石器時代の遺物をはじめとして、いろいろな時代の遺物が採集されています。このような状況を考えますと、本年度の調査だけにとどまらず今後も機を見て文化財の保存と究明にとりくんでいく必要があると思われます。また調査の期間中には、隣接地区から甕棺墓群や住居址群なども発見され、予想外の成果がありました。調査地区一帯を網羅するには、さらに今後の精査が必要ですが、一応は当初の目的を達成できたものと思っております。

調査にあたりましては、九州大学医学部解剖学教室をはじめとして多くの諸先生方の御協力・御指導を仰ぎました。さらに、地主の方々・地元の方々には多忙にもかかわらず、終始調査に御協力いただきました。茲に厚く御礼申し上げます。

昭和58年3月31日

菊水町教育長 齋木義男

例　　言

1. 本書は、熊本県玉名郡菊水町における昭和57年度埋蔵文化財調査報告書である。
2. 調査は昭和57年11月より昭和58年3月における国庫補助事業として、菊水町教育委員会が実施した。
3. 本書の執筆は池田道也が担当した。
4. 本書に使用した図の作成は、池田道也・坂田和弘・茂山宏美が主に行なった。製図は池田道也が実施した。
5. 本書の編集は、福永光隆・池田道也が担当した。

本文目次

一、調査区の位置と環境	1
1. 赤穂原調査区	1
2. 関連調査区	1
二、調査の目的・方法・経過	3
三、調査概要	5
1. 焼米柳林地区	5
2. 赤穂原第1地区	13
3. 赤穂原第2地区	16
4. 松坂原遺跡	16
5. 高野本村地区	24
6. 赤穂原第3地区(竈門寺原箱式石棺)	26
四、調査総括	31

挿図目次

第1図 調査位置図	2
第2図 焼米柳林地区調査図	6
第3図 1号・10号甕棺墓遺構図	7
第4図 1号・3号甕棺実測図	9
第5図 2号・4号・7号・10号甕棺実測図	10
第6図 11号甕棺墓遺構・甕棺実測図	14
第7図 層序図	15
第8図 松坂原遺跡調査図	18
第9図 } 松坂原遺跡出土遺物実測図	19
第11図 } 松坂原遺跡・高野本村地区出土遺物実測図	19
第12図 松坂原遺跡・高野本村地区出土遺物実測図	23
第13図 松坂原遺跡出土土器図	25
第14図 高野本村地区調査図	27
第15図 高野本村地区1グリッド遺構平面図	28
第16図 赤穂原第3地区(竈門寺原箱式石棺)調査図	29
第17図 石棺・副葬品実測図	30

調査組織は次の通りである。

調査主体 菊水町教育委員会

調査責任者 斎木 義男（菊水町教育長）

調査員 池田 道也（菊水町歴史民俗資料館学芸員）

事務局 前川 一丸（菊水町歴史民俗資料館館長）

福永 光隆（菊水町文化課係長）

堤 郁子（菊水町文化課主事）

調査指導 田中 良之（九州大学医学部助手）

調査協力 坂田 和弘・茂山 宏美（熊本大学学生）

作業員 池田 英臣・小林ツヨミ・宮川 千俊・宮本 毅
松浦安佐子・中山 美紀・益田 博美

——町内重要遺跡調査報告（5）——

一、調査区の位置と環境

今年度の調査は、菊水町北部の菊池川流域左岸に位置する赤穂原台地を中心に実施したものである。

1. 赤穂原調査区

赤穂原台地は熊本県玉名郡菊水町竈門及び下津原に広がる台地で標高約60mを測る。この台地は、もともと平坦部分の多い地形だったらしく、戦時中飛行場が設けられたこともある。さらに、昭和47年～48年には、赤穂原台地を含む一帯に構造改善事業が行われ、今では台地一面に西瓜栽培のビニールハウス群がひしめいている。構造改善事業の際には、弥生式土器を中心とする多数の遺物が出土しており、当台地の周辺からも、古閑原台地をはじめとして、縄文～弥生時代を主とする土器・石器類がいたる所から採集されている。

また、台地の縁辺部には、三ツ瀬横穴群、大屋横穴群、久米野横穴群、下津原上西原石棺、下津原東上原石棺など古墳時代の遺跡も豊富である。

2. 関連調査区

関連調査として、①焼米柳林調査区 ②高野調査区 ③松坂原遺跡調査区（第2次）の3区を選定し調査を実施した。

焼米柳林調査区と高野調査区は、直線距離で約550m離れており、両調査区は赤穂原台地から県道山鹿・玉名線を隔てて、東南約2500mに位置している（第1図参照）。両調査区を含む一帯は、これまで埋蔵文化財に関する情報がきわめて乏しい地区であった。焼米柳林調査区は北および西へ急傾斜する台地突端に位置し、北に菊池川を臨むことができるかなり眺望のいい所である。高野調査区は、ここから西へ550mにあり、高野の集落の西端のはずれにあたる。高野調査区の西側はすぐ急傾斜面となり、同調査区あたりが附近一帯では最も高い部分で、標高約80mを測る。北方の古閑原台地と対峙し、この間を県道山鹿・玉名線が開通している。

松坂原遺跡調査区は、前年度トレンチによる分布調査を行った所で、附近が宅地化されていることもあり、毎年少しづつ調査を予定している箇所である。この調査区の南隣りには、昭和48年に工場が誘致され、その際に発掘調査がその部分については実施されている。松坂原遺跡の西方には江田船山古墳をはじめとする古墳群で知られる清原台地がある。附近一帯の標高は約33mを測る。



(第1図 調査地区位置図)

二、調査の目的・方法・経過

調査の主な目的は、『赤穂原台地を中心とする埋蔵文化財包蔵地の分布確認』であった。調査地区の中でも、特に緊急を要する地区を優先して調査を行った。台地中央部、つまりなだらかに盛り上がった台地の最も高い部分は、前述したように飛行場が造られたこともあり、かなり削平されている状況だった。したがって、ある程度は本来の地形を保っている台地周縁部分の遺物包含層の確認を中心に調査を進めることにした。また、下津原西の北赤穂原石棺などは、一部が露出していたこともあり、内部の遺存度を考えると、できるだけ早い機会に調査する必要があった。

調査の方法としては、土地の利用状況に応じてトレンチ発掘をする部分とグリッド発掘をする部分にわけた。トレンチは原則として幅1m、グリッドを設定する場合は、4×4mとした。

調査は焼米柳林地区から実施した。9月9日、焼米柳林の牛蒡畠から^{じょうばう}甕棺発見の知らせをうけたため、現地を訪れると、出土した破片や地形などから、甕棺墓群が形成されていると考えられた。このため、10月から予定していた赤穂原台地と地理的に近いこともあって、関連調査区に選定し、10月7日から調査を開始した。経過概略は次の通りである。

- 10月7日 甕棺出土地周辺の視察。一部露出した甕棺中に人骨らしきものを確認。調査区設定。
- 10月8日 埋葬人骨の調査依頼のため九州大学医学部解剖学教室の田中良之助手に連絡。甕棺周辺の土剥ぎ。
- 10月9日 甕棺周辺の土剥ぎ。
- 10月10日 甕棺周囲の土剥ぎ。平板実測。
- 10月11日 前日と同じ。
- 10月12日 田中良之氏と調査員池田は人骨の検出。
- 10月13日 調査区拡張。
- 10月14日 5・6・7・8号甕棺出土。遺存度悪し。
- 10月16日 拡張区調査。4・5・6号甕棺の検出。一部実測。
- 10月17日 拡張区調査。7・8・9号の検出。甕棺出土状況実測。平板実測。
- 10月20日 拡張区調査。甕棺出土状況実測。
- 10月21日 特に保存の良い10号甕棺の検出。人骨の遺存の期待もあったが、棺内に多量の土が流入しているのを確認。
- 10月22日 拡張区の調査。本日で実測終了。10号甕棺中の骨は、すでに腐敗が進み、わずかな骨片が認められる程度である。
- 10月27日～29日 埋めもどし。

- 11月17日～19日 出土した遺物の移動・保管。
- 11月22日 遺物整理。
- 11月24日～26日 赤穂原第1調査区（通称赤穂原桜跡）の調査。
- 11月29日 埋めもどし。
- 12月1日 関連調査区である松坂原遺跡の調査開始。2×8mのトレンチを2本設定。
- 12月2日 松坂原第1トレンチ掘り下げ。
- 12月3日 前日同様、第1トレンチの掘り下げ。遺物多し。
- 12月6日 本日から赤穂原第2地区へ移る。4×4mのグリッドを4個設定。第1～2グリッドを開掘。
- 12月7日 第3～4グリッドを開掘。全グリッドとも地盤まできわめて浅い。遺物無し。グリッド断面図実測。
- 12月8日 赤穂原第2地区埋めもどし。
- 12月9日 本日から再び松坂原遺跡の調査。第1トレンチ実測。第2トレンチのⅢ層まで開掘。
- 12月10日 第2トレンチ掘り下げ。遺物は小片であるが量が多い。
- 12月13日 土器及び遺構の検出。壺棺2基出土。
- 12月15日 壺棺出土状況実測・写真撮影後遺物の取り上げ。2基とも腐蝕した骨細片が残る。
- 12月16日 第2トレンチの西南隅に住居址の一部を検出。縄文期のものと推定。
- 12月17日 第2トレンチ実測・写真撮影。
- 12月20日 松坂原遺跡埋めもどし。
- 12月21日 埋めもどし。松坂原遺跡調査終了。
- 1月13日 高野本村地区調査開始。1×15mのトレンチ1本設定。
- 1月14日 4×4mのグリッド2面設定。開掘。地盤まできわめて浅い。
- 1月24日 トレンチからは弥生式土器小片数点とピット状遺構3個検出。土質はきわめて硬い。周辺は住居址の可能性が大きい。
- 1月25日 第1グリッド再掘。第2グリッドと若干様相が異なるため、10cmほど掘り下げ。北西隅から住居址の一部らしき遺構を検出。さらに5cmほど掘り下げたところ、ほぼグリッド全面に広がると思われる住居址を検出。
- 1月26日 住居址検出作業。
- 1月27日 住居址の写真撮影及び実測。高野本村調査区調査終了。
- 2月7日 窪門寺原石棺の調査開始。石棺主軸方向に石棺上の土を半截し断面を調べつつ排土を行う。
- 2月8日 石棺上には明確な盛り土はなく、蓋石は2枚の板石を使用。そのうちの一方は、

整形が立派で面取りがほどこしてある。

- 2月9日 蓋石が露呈した時点で実測、写真撮影。その後蓋石撤去。棺内に多量の土が流入していたため、その排土。人骨の一部を確認。
- 2月12日 人骨検出。及びその実測、取り上げ。尚、人骨の実測・取り上げのため九州大学医学部田中良之氏来る。人骨の遺存度きわめて悪い。鉄剣出土。
- 2月15日 人骨取り上げ後、鉄剣の出土した真下から、さらに刀子出土。石棺実測。
- 2月16日 原地復原作業。石棺はもとの場所にそのまま埋め戻す。午後から北赤穂原第2地区へ移動。
- 3月8日～29日 地形測量、遺物の整理・復原・実測など。3月29日で作業完了。

三、調査概要

調査は緊急を要する所から次の順序で実施した。焼米柳林地区→赤穂原第1地区→赤穂原第2地区→松坂原遺跡（第2次調査）→高野本村地区→赤穂原第3地区（竈門寺原箱式石棺）。次に、各地区の層序・遺構・遺物の概要を述べる。

1. 焼米柳林地区（第2図）

同区は、牛蒡畠でその収穫の際に甕棺数基が偶然発見されたため、昭和57年度の関連調査区に選定した地区である。同区一帯は、5年程前に一度耕地整備が施されており、甕棺らしい破片が出土している。したがってある程度は、遺構の破壊・攪乱を覚悟して調査を開始した。

◎層序・遺構・遺物

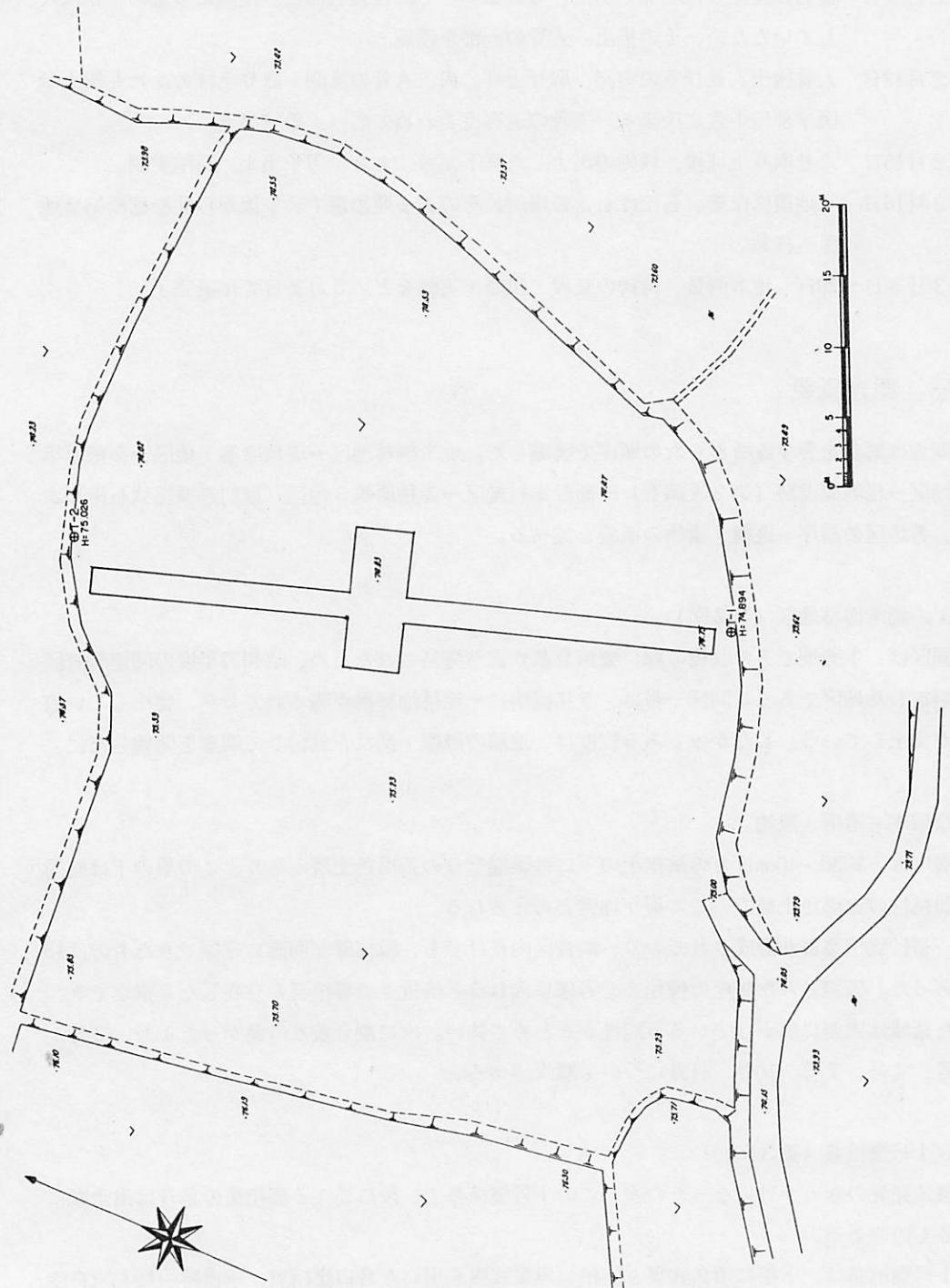
層序は、約30～40cmほどの耕作土の下に砂礫混じりの茶褐色土層があり、この層の下は堅固な弱粘性の赤褐色土層で、この層が地盤と考えられる。

一帯は甕棺墓群が形成されており、調査区内だけでも、原位置が明確に把握できたものは13基あった。破壊された破片の種類まで考慮に入れると倍近くの甕棺墓が存在したと推定でき、また墓域は東側に広がっている可能性がきわめて強い。次に割合残りの良かった1号、2号、3号、4号、7号、10号、11号について順次述べる。

〈1号甕棺墓（第3図）〉

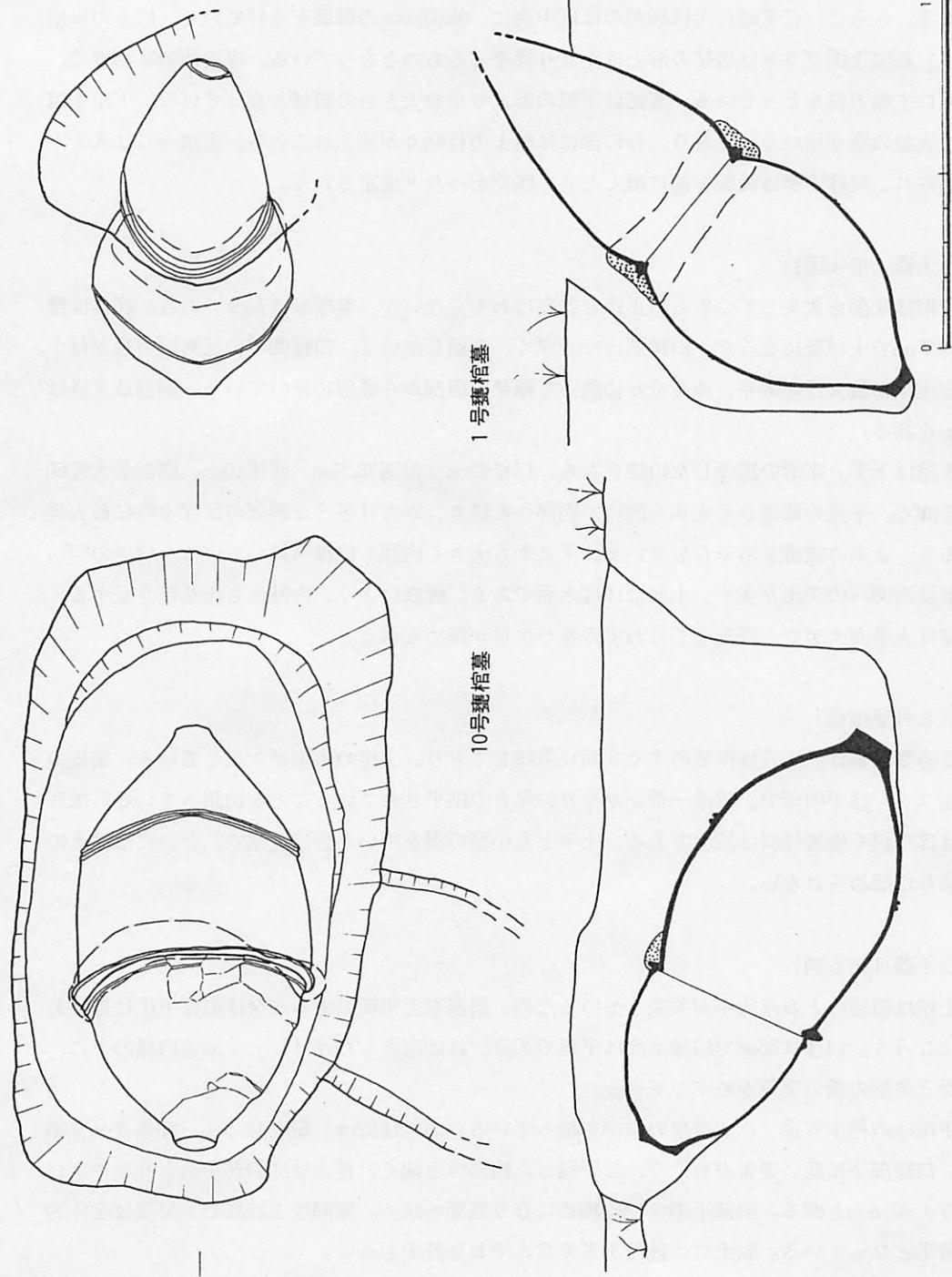
遺跡発見のきっかけになったのが、この1号甕棺墓で、後に述べる甕棺墓の番号は出土順によるものである。

1号甕棺墓は、下棺に須久式甕と上棺に黒髮式甕を用いた合口甕棺で、本遺跡中最も遺存度



(第2図 焼米柳林甕棺墓群遺跡図)

(第3図 1号(右)・10号(左)甕棺墓遺構図)



の良いものである。上棺の破壊状況から墓塙は少なくとも、20cm以上削平されているものと思われる。さらに、発見時に上棺胴部のほぼ中央に、幅約20cmの破壊をうけている。以上の事情より、墓塙上面プランは当初の形とはかなり異なったものとなっている。埋置傾斜は46度で、北西に主軸方位をとっている。墓塙は下棺の形よりやや大きめの斜塙となっている。下棺上棺とも大型の甕が用いられており、合口部には粘土の目貼りが施されている。下棺からは人骨が検出され、埋葬姿勢は両腕を前に組んだ立て膝であったと推定される。

○土器（第4図）

上棺は底部を欠失しているため正確な器高はわからないが、復原形は72cmである。底径は推定約7cmで上げ底になろう。口縁部はやや厚く、内傾している。口縁部下に三角形突起が付き、胴部上位に最大径があり、ゆるやかに曲って細身の胴部から底部に続いている。胴部最大径は45cmを測る。

下棺は「T」字形の肥厚した口縁をもち、口径42cm、器高75.5cm、底径10cm、胴部最大径60cmを測る。平底の底部から大きく開いて胴部へと続き、かなり張った胴部のほぼ中央に最大径があり、2条の突帯をめぐらしている。そこから大きく内傾し口縁へ続いている。口縁の「T」字形は内側への突出が多く、上面はほぼ水面である。焼成はよく、内外とも赤茶色を呈する。調整は大半がナデで、底部近くにわずかなハケ目が認められる。

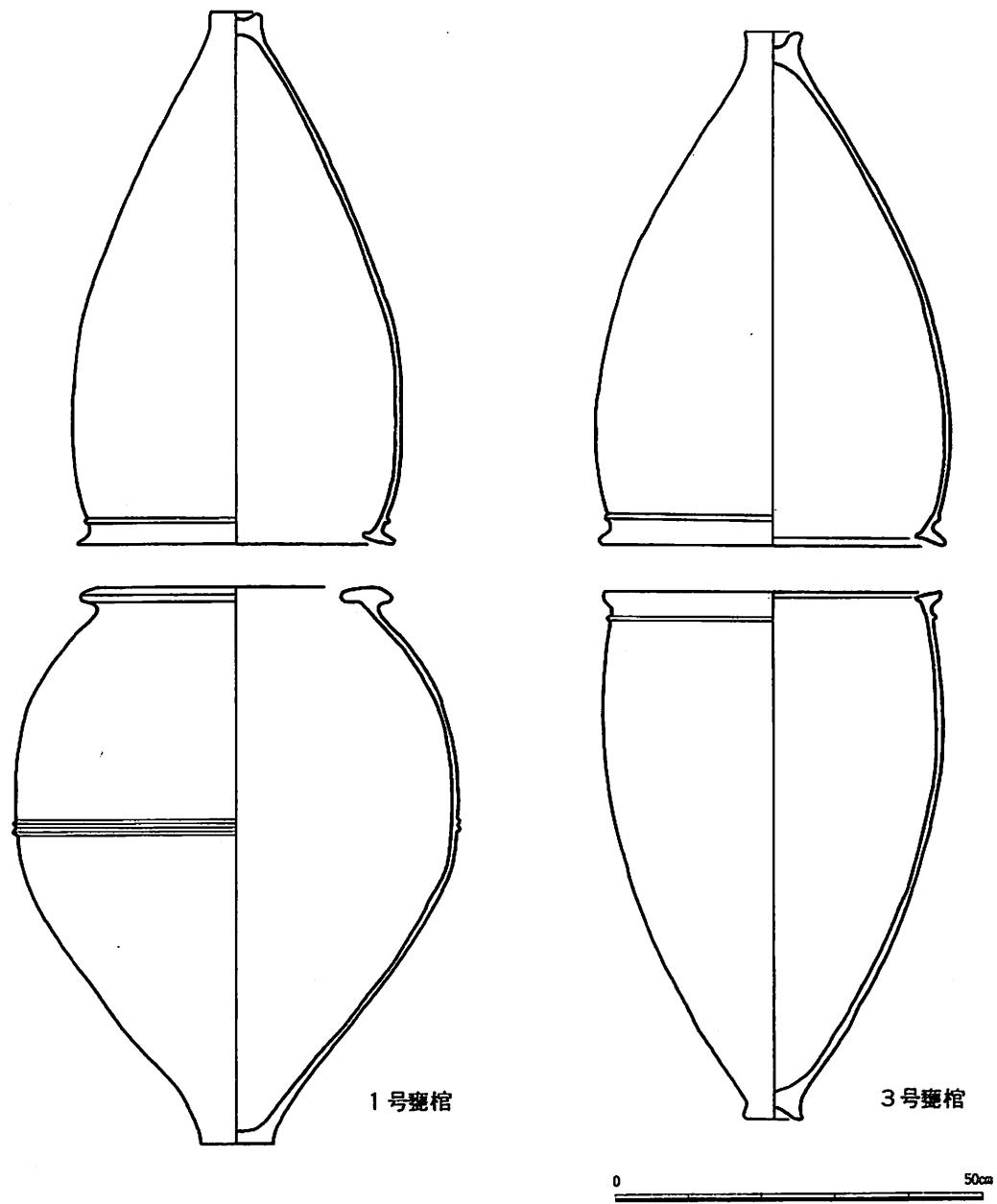
〈2号甕棺墓〉

2号甕棺墓は、1号甕棺墓のすぐ北面に隣接しており、上棺の大半が欠失している。墓塙の上面プランは不明確で、附近一帯がかなりの厚さで削平されていることを物語っている。塙底はほぼ平坦で埋置傾斜は32度である。上下とも小型の甕を用いた合口甕棺で、合口には粘土の目貼りは認められない。

○土器（第5図）

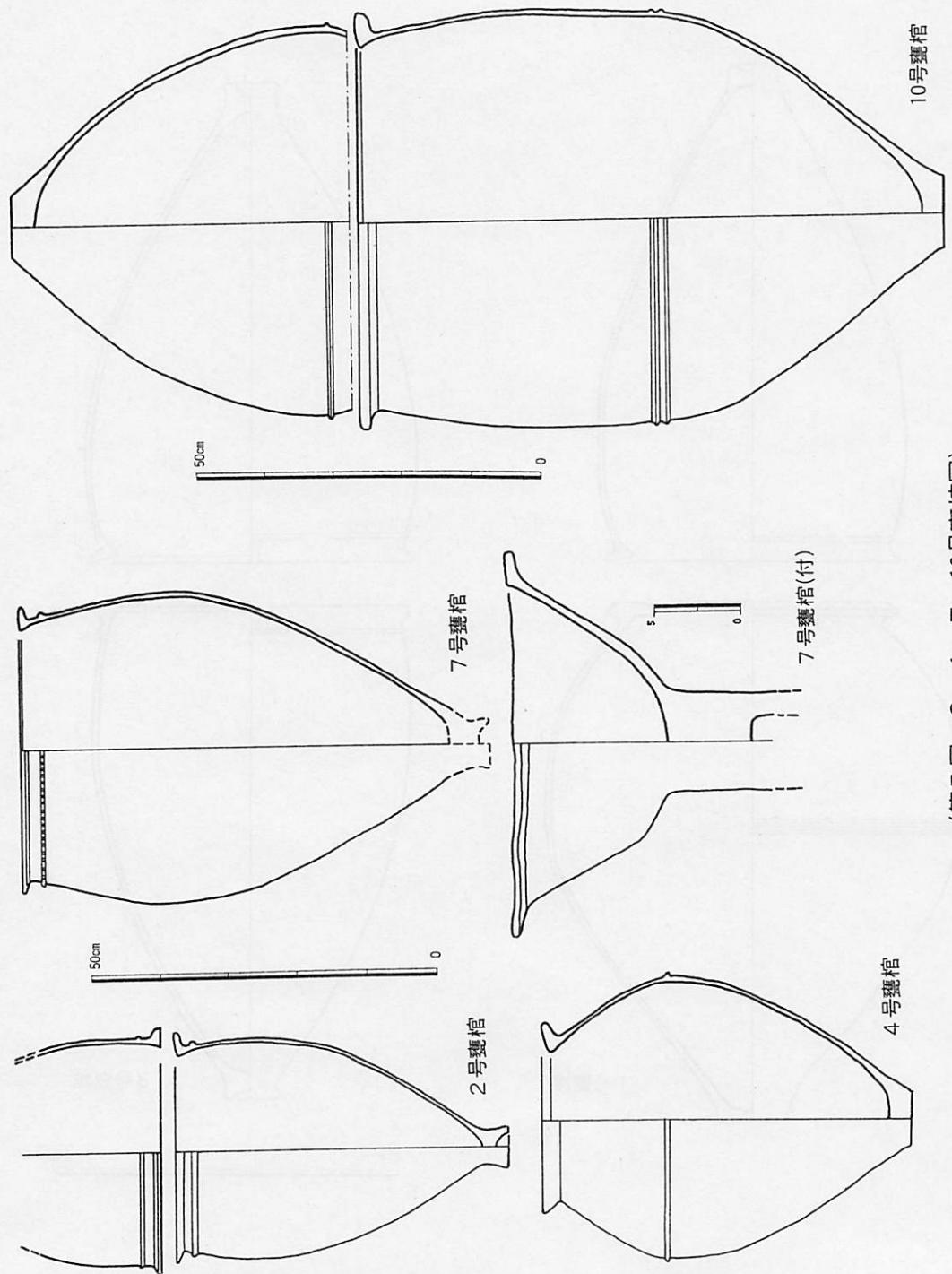
上棺は前述のとおり大半が欠失しているため、器高など不明であるが全体形は下棺に近いものになろう。口径は36cmで口縁上面は平坦である。ほぼ直立した逆「L」字形の口縁の下に、断面三角形の低い突帯がめぐっている。

下棺は内傾する逆「L」字形の口縁を持っている。口径は32cm、器高48.5cm、底径6cmを測る。口縁部下に底い突帯がめぐり、若干張った胴部へと続く。最大径は胴部中央よりやや上にあり、30.8cmを測る。胴部下半はやや細めになり底部へ続く。底部は上げ底で、器壁は全体的に薄手となっている。胎土には砂粒を多く含んでおり若干もろい。



(第4図 1号・3号壺棺図)

(第5図 2・4・7・10号甕棺図)



〈3号甕棺墓〉

3号甕棺墓は1号甕棺墓から北西へ約2.5m離れた位置にあり、墓塚の上面プランは現状で150cm×110cmの不整橢円形である。棺は上棺下棺とも黒髮式の大型甕を利用した合口で、埋置傾斜は41度である。合口部にはわずかに灰白色の粘土が残っており、目貼りの痕跡がある。下棺底部附近には流入した土とともに、わずかながら骨片が認められた。上棺は、かなり早い時期に破壊をうけたものと思われ、口縁附近の破片は下棺内部へ土とともに落ち込み、胴部の地表に近い部分はかなり破壊散逸した状態であった。

○土器（第4図）

上棺は内傾する逆「L」字形の口縁を持ち、わずかに肥厚する口縁は平坦である。やや張った胴部の最大径は中央より上位にあり、48cmを測る。また口縁のすぐ下には、底い突帯がめぐっている。胴部中央より下位は細身となり、そのまま底部へと続いている。口径は47cm、器高72.5cm、底部は上げ底で8cmを測る。胎土はあらくもろい。

下棺は上棺と大差ないプロポーションであるが上棺に比べてやや胴の張りが少ない。口縁は逆「L」字形で上面は浅くくぼんでいる。内端がわずかに突出し、口縁のすぐ下には底い突帯がめぐっている。胴部最大径は中央より上位にあり、46cmを測る。口径46cm、器高71.5cm、底部はあげ底で径8cmを測る。胎土は荒く若干もろい。

〈4号甕棺墓〉

4号甕棺墓は、3号甕棺墓のすぐ隣りに接しており、ちょうど1号及び2号甕棺墓の位置関係に酷似している。合口式の甕棺墓であるとすれば、残存するのは下棺だけで、主軸方位が3号甕棺墓よりも東側に傾いている。4号甕棺墓を合口の可能性が強いと考えるのは、周囲に上棺と思われる土器細片が散在することや表土が過去に整地のためかなりの深さで削平されていることなどが理由である。墓塚プランは、表土の削平および3号甕棺墓と重複していることもあって明確にできなかった。埋置傾斜は46度である。

○土器（第5図）

内傾する逆「L」字形の口縁をもち、上面はわずかにくぼんでいる。径7.5cmの底部から大きく開きつつ胴部へと続いている。胴部最大径は中央よりやや上にあり、最大径となる部分に突帯をめぐらしている。最大径は41.5cmを測る。ここから大きく内傾し口縁へ続く。口径28cm、器高53.5cmを測る。全体的に器壁はうすくもろい。

〈7号甕棺墓〉

現状では単棺の墓棺墓と考えられる。ただし、先程から何度もくり返し述べているように、上棺が破壊されその後の度重なる耕作のため消失してしまった可能性もわずかながら残っている。墓塚プランも不明確である。粘土の目貼り痕なども皆無である。この甕棺墓の底部は埋置する段階で既に欠失していたらしく、それを補うために高杯の一部を利用している。周囲の状況から考えると原位置も多少ずれている可能性がある。

○土器（第5図）

内傾する逆「L」字形のやや肥厚した口縁を持つ。口縁部の下には低い断面三角形状の突帯がめぐり、刻目を有している。胴部はいくぶん張り、最大径は中央より上位にあり45.5cmを測る。底部は欠損しており器高は推定68.5cm内外と思われる。口径は42.5cmである。調整痕は口縁部寄りの内側に多く認められ、ヘラによるナデと底部近くにハケ目が見られる。欠損部分を補ってあった高杯は脚部から上半分で、明褐色を呈している。胎土に多くの砂粒を含み、焼成が悪くもろい。形もいびつである。

〈10号甕棺墓（第3図）〉

10号甕棺墓は、上棺に口縁部を欠いた大型鉢を用い、下棺に大型甕を用いている。上棺と下棺の口径が一致する接口式である。

今回発掘した甕棺墓の中では比較的遺存度は良好だった。他の甕棺墓同様表土がかなり深く削平されているため、墓塚上面プランはわからないが、発掘時の墓塚上面は不整隅丸長方形で、186×103cmを測る。現状は一方が緩傾斜、他方が急傾斜となる竪穴状を呈している。塚底は平坦である。埋置傾斜は32度で、接合部分には灰白色の粘土の目貼りを施してある。下棺からは流入した多量の土に混じってわずかながら骨片が認められた。

○土器（第5図）

上棺は口縁部を欠いた大型の鉢を使用している。口縁下には断面三角形の突帯がめぐり、ゆるやかに湾曲して底部へと続いている。残存高は49.5cm、胴部最大径51cmを測る。突帯とその上下の部分には浅いナデが認められる。内外の表面の剥離が著しく全体的にもろい感じである。

下棺は、逆「L」字形の肥厚した口縁をもち、口径61cm、底径11cm、器高は75.5cmの大型甕である。肉厚の平底から開きつつ胴部へ続き、ほぼ中位にある突帯からいくぶん直立気味にのび、上部でわずかに内傾している。胴部最大径は中央よりやや上位にあり51cmを測る。2条の突帯は断面三角形を呈する。胎土に砂粒を多く含み、口縁に近い部分ほどもろい。上半分の内外の表面は薄く剥離している部分が多く、ざらついた感じである。調整は大半がナデである。

〈11号甕棺墓（第6図）〉

11号甕棺墓は、口縁部を欠いた大型の甕を用いた单棺である。墓塚上面プランは明確でなく、棺の上半分は土圧で完全につぶれており、下半分も正常な状態と比べるとかなり扁平な恰好で出土した。斜塚の下部はかろうじて残っており塚底は平坦である。

○土器（第6図）

口縁を欠いている。平底の底部から開いて立ちあがり、やや細身の胴部へと続く。胴部中位より上に最大径があり、そこに2条の断面三角形状の突帯がめぐっている。最大径は55cmを測る。以後、内傾しつつ頸部へと続いている。残存高79.3cm、底径7.5cmを測る。胎土焼成は良好である。胴部下位にナデ痕が認められる。

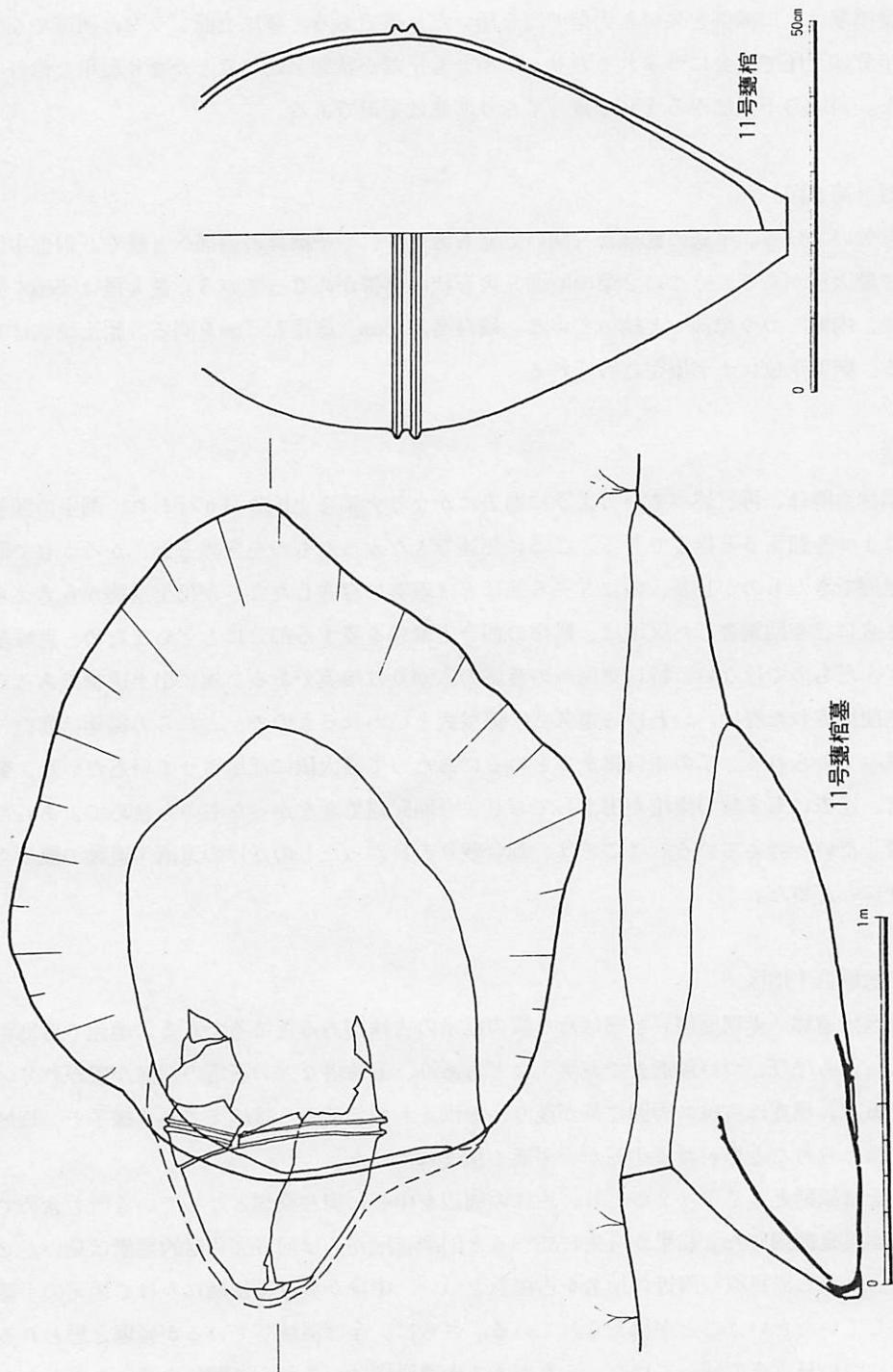
◎小結

焼米柳林遺跡は、再三述べているように過去にかなり大幅な土地改良が行われ、削平の顕著な所では1mを超えると推定できる。ここに記述できなかったものを含めると、かろうじて原位置の把握できたものが13基、他に5～6基ほどは確実に存在したことが出土遺物から考えられる。さらに、今回調査した区域は、耕作の都合上緊急を要する部分にとどめたため、墓域全体におよんだものではない。特に東側への墓域の広がりは確実である。次に出土遺物であるが、棺として使用された甕は、いわゆる須久式と黒髮式といわれるもので、これらの編年は西健一郎氏が試みておられる。この報告書をまとめるにあたって最大限に活用させていただいた。菊水町では、過去にも多数の甕棺が出土しており、今回記述できなかったものも含めて、あらためて発表したいと考えている。ここでは、割合残りの良かったものだけの遺構・遺物の概要とその紹介にとどめた。

2. 赤穂原第1地区

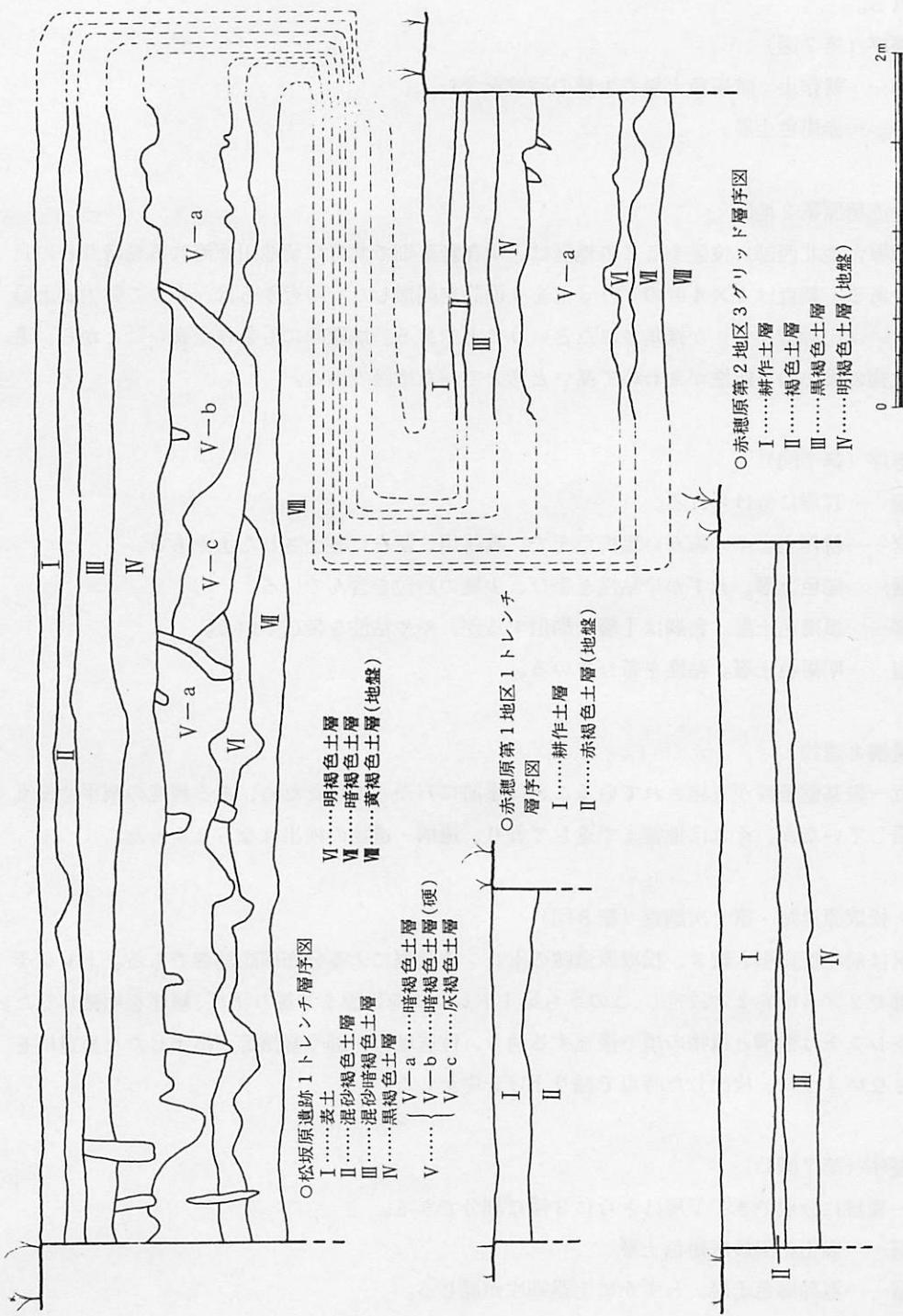
同調査区は通称「赤穂原桜」と呼ばれる桜の巨木の古株があるところである。地元では別称「桜さん」とも呼び、つい最近までお供えなどもあり、五輪塔などの石塔の残骸が置かれていたそうである。現在は古株の周囲に茶が茂り、お供えも数年前から途絶えている様子で、畠地から寄せ集められたと思われる小石がうず高く積まれていた。

トレントは原則として1×2mとし、古株の周辺を中心に現在桑畠となっている所も含めて全部で15本設定開掘した。結果から先に述べると同調査区からは何ら文化財的要素は見いだせなかった。しかし赤穂原桜附近の地名を古屋敷といい、中世から近世初期にかけて地元の土豪族が居住していたということが伝えられている。さらに、今は消滅しているが経塚と思われる塚が近くについ最近まで残っていた。したがって赤穂原桜は、これらに関係の深いものとも考



(第6図 11号甕棺墓遺構図・甕棺図)

(第7図 層序図)



えられる。

○層序（第7図）

I層……耕作土。暗褐色土層で少量の砂粒を含む。

II層……赤褐色土層。

3. 赤穂原第2地区

赤穂原台地北西部に位置するこの地区は、現在野菜畑で北方に菊池川が流れる見晴らしの良い所である。調査は $4 \times 4\text{m}$ のグリッドを4面設定開掘した。附近からは、かつて弥生式土器（あるいは土師器か？）が採集されたということである。地理的にも条件が良いことから、遺構・遺物の検出の可能性がきわめて高いと考えていた地区である。

○層序（第7図）

I層～IV層に分けられる。

I層……耕作土。キメ細かい黒褐色土で、農耕用に新たに客土された土である。

II層……褐色土層。わずかに粘性を帶び、少量の砂粒を含んでいる。

III層……黒褐色土層。色調はI層に酷似するが、やや粘性を帶びている。

IV層……明褐色土層。粘性を帶びている。

○遺構と遺物

附近一帯基盤整備が実施されていることは事前にわかっていたため、ある程度の削平や攪乱は覚悟していたが、それは地盤まで達しており、遺構・遺物の検出はならなかった。

4. 松坂原遺跡・第2次調査（第8図）

同区は前年度に引き続き、松坂原遺跡のトレンチ発掘による分布確認調査である。トレンチは全部で $2 \times 8\text{m}$ を2本設定し、このうち第1トレンチを地盤まで掘り下げ、層序を明確にした。第2トレンチは遺構と遺物の項で後述する通り、住居址の一部や壺棺等が出土したため遺構をこわさないように、検出した時点で掘り下げを中止した。

○層序（第7図）

I～V層に分層でき、V層はさらに3種に細分できる。

I層……表土。混砂灰褐色土層。

II層……混砂褐色土層。わずかに土器細片が混じる。

III層……混砂暗褐色土層。土師器と思われる小片と縄文式土器小片が攪乱された状態で出土

する。

IV層……黒褐色土。若干粘性を帶びている。

V層……次の3種に細分できる。

V-a層…暗褐色土層で、縄文晚期の遺物を含む層である。

V-b層…暗褐色で色調はV-a層に近いが、非常に硬くV-a層との相違は歴然としている。層の厚さ20~30cm、幅約2mでトレンチと交叉するように帯状に走り、中ほどが溝状にくぼんでいる層である。

V-c層…V-b層の上だけに見られる灰褐色の層で、少量の須恵器小片を含む。

VI層……明褐色土層。

VII層……暗褐色土層。

VIII層……黄褐色土層（地盤）。

◎遺構

第2トレンチの南西隅にピットと住居址の一部と思われる遺構を検出した。住居址内の土には多量の炭化物が含まれていた。地表から約90cmのIV層下部からV層にかけて造られており、V層が明確な縄文晚期の包含層であるから、それ以降のものである。検出部分がごく僅かなため住居址内からは、明確に年代を把握できる遺物が出土していない。全体形は矩形になると推定される。

住居址の他に、2基の壺棺が出土した。西側の住居址に近いほうを1号壺棺とした。1号壺棺のほうの墓塚上面プランは90×45cmの楕円形で、2個の壺を利用していている。下棺のほうは口縁の一部を破損しているだけで、きわめて残りが良いが、上棺として使用されているほうは、完全に潰れていた。内部には流入した土砂に混じり骨片が見られた。2号壺棺の墓塚上面プランは65×50cmの不整楕円形で、棺は口縁部を意図的に打ち欠いたものを用い、蓋には不整形の凝灰岩を使用していた。これにも多量の土砂が流入し、僅かな骨片が見られた。土器のそれぞれの特徴は次の『遺物』の項で述べる。

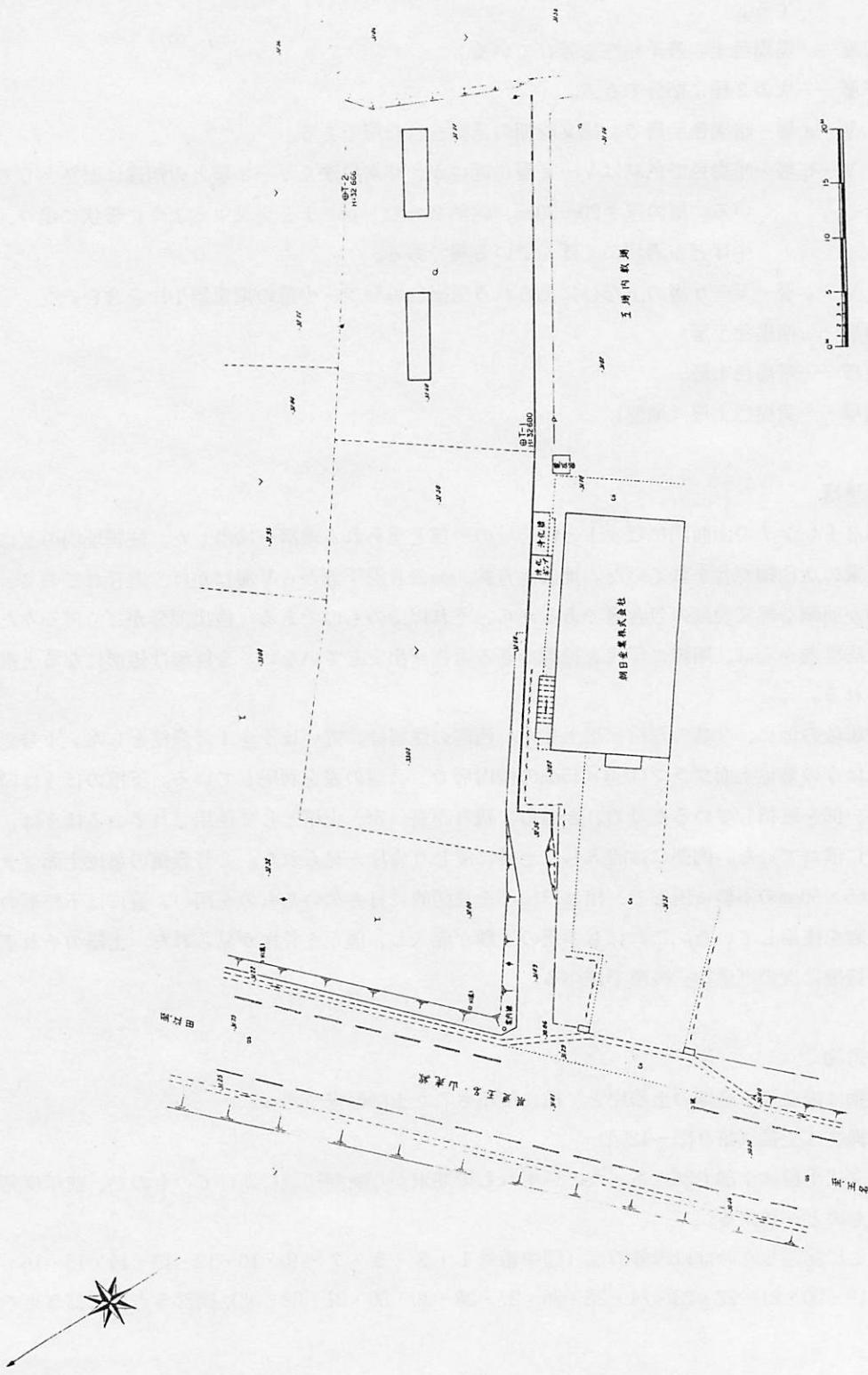
◎遺物

遺物は縄文後～晚期の土器片と、棺に使用された土師器壺である。

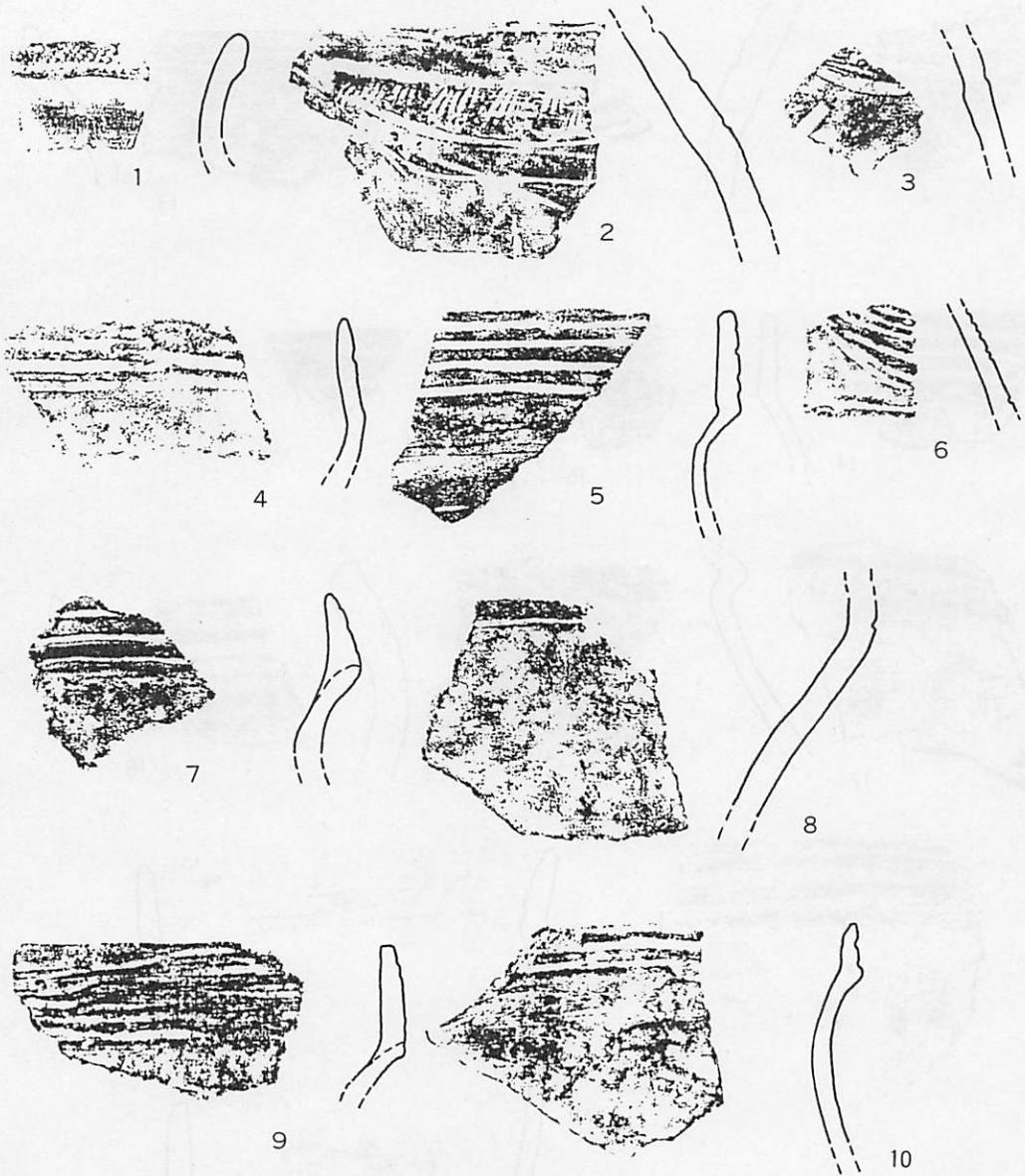
○縄文式土器（第9図～12図）

縄文式土器は全部で35点あった。いずれも後期末から晩期初頭にかけてのもので、前年度発掘のものと一致する。

ここに記述したのは口縁部27点（図中番号1・3・5・7・9・10・12・13・14・15・16・18・19・20・21・22・23・24・25・26・27・28・29・30・31・32・33）、胴部6点、底部2点で

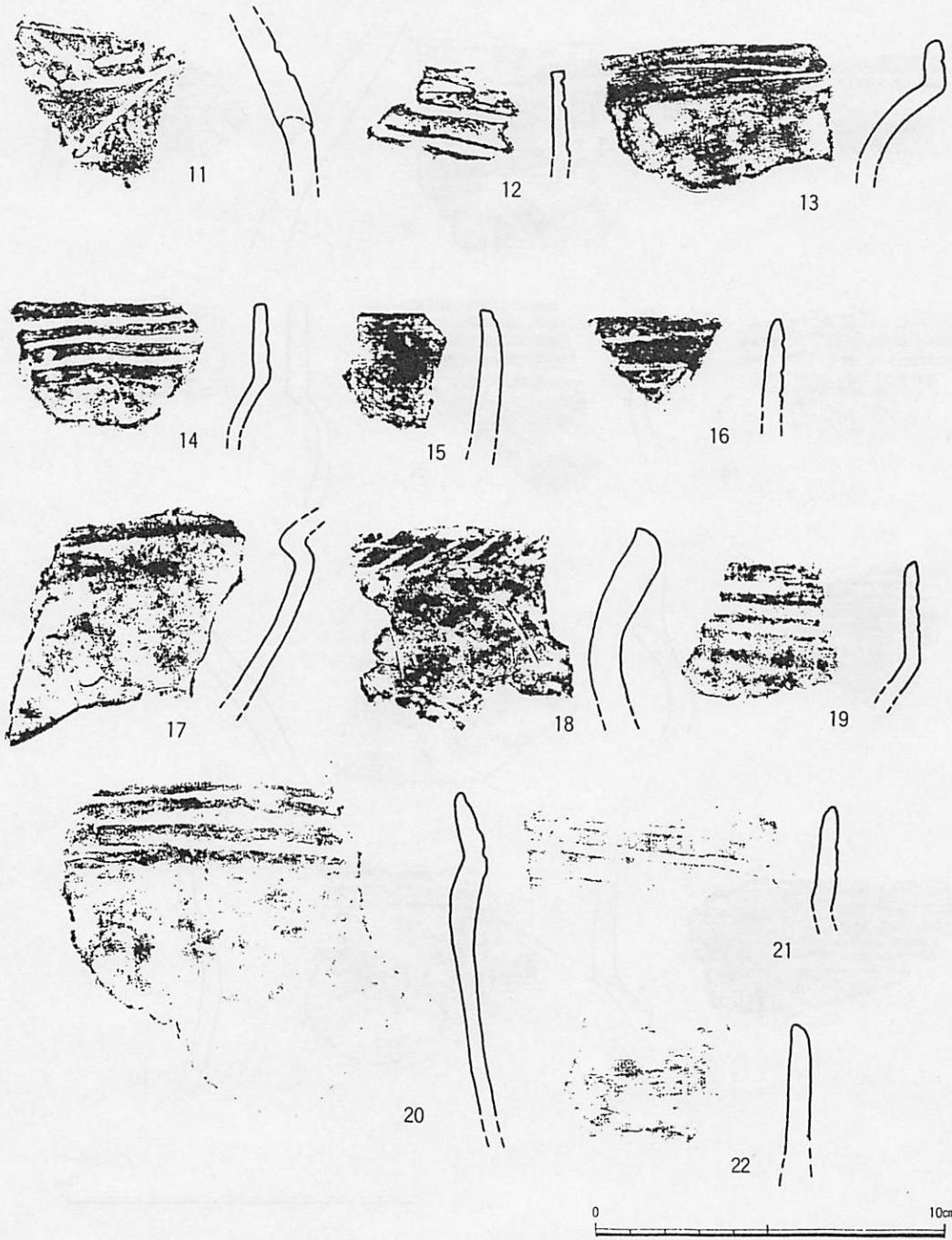


(第8図) 松坂原遺跡調査位置図

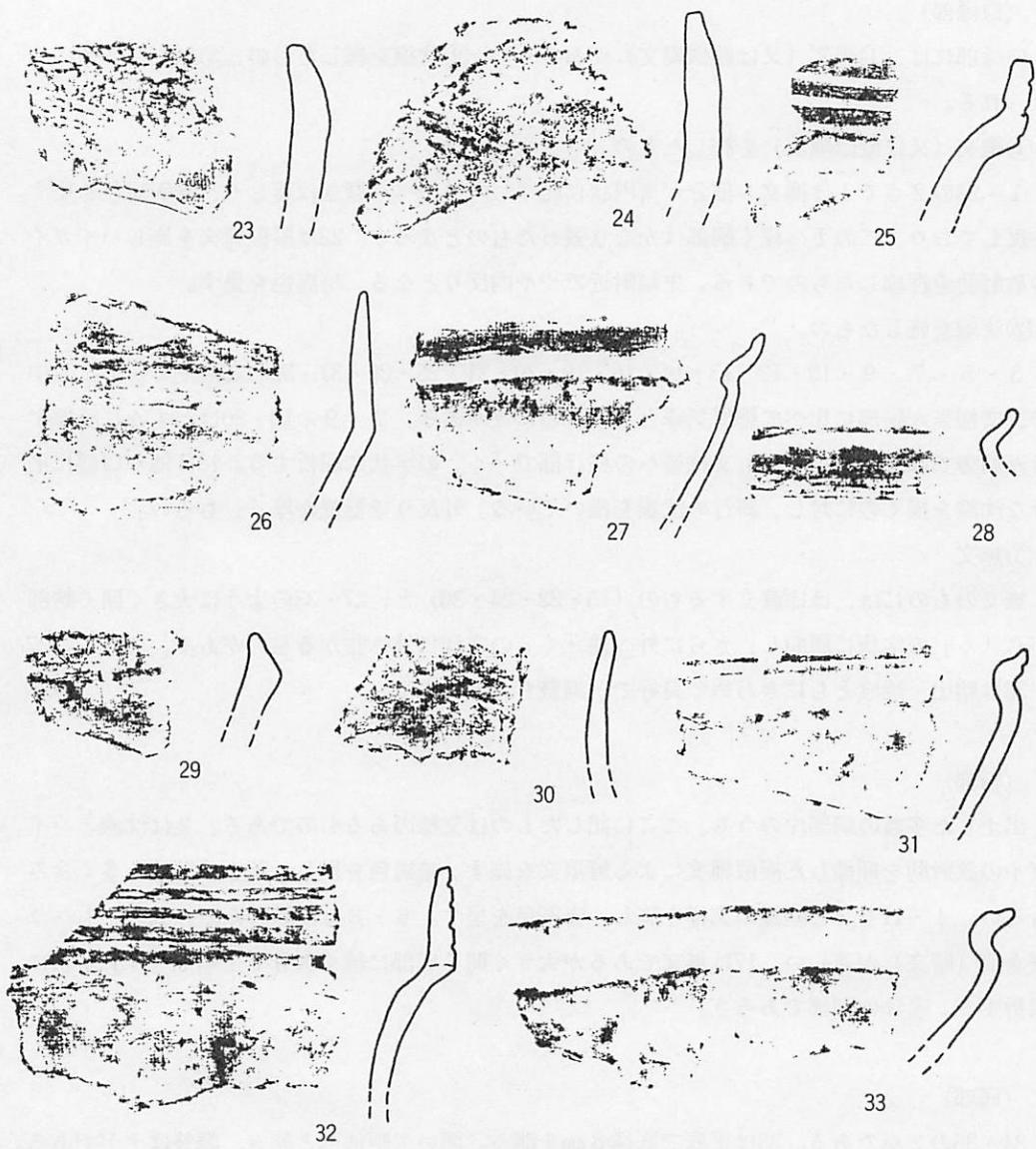


0 10cm

(第9図 松坂原遺跡出土遺物)



(第10図 松坂原遺跡出土遺物)



(第11図 松坂原遺跡出土遺物)

ある。

〈口縁部〉

口縁部には、①縄文（又は擬似縄文）があるもの、②沈線を施したもの、③無文の3種に分けられる。

①縄文（又は擬似縄文）を施したもの。

1・23の2点で1は縄文の部分が楕円状に肥厚し内外のヘラ磨きは著しく、暗灰褐色を呈す。外反しており、この下へ続く胴部はかなり張ったものとなろう。23は擬似縄文を施しハイガイの放射肋を押捺したものである。先端附近でやや内反りとなる。暗褐色を呈す。

②沈線を施したもの。

3・5・7・9・10・12・13・14・16・19・20・21・25・26・31・32の16点である。この中で、文様帶が胴部に比べて肥厚氣味となるものに5がある。7・9・10・20はわずかに肥厚するが顯著ではなく、いずれも文様帶への移行部で「く」の字状に屈折する。18は他が口唇に平行な沈線を描くのに対し、斜行の沈線を描いている。外反りで器壁が厚く、もろい。

③無文

無文のものには、ほぼ直立するもの（15・22・24・30）と、27・33のように大きく開く胴部から「く」の字状に屈曲し、さらに外へ逆「く」の字状に外へ曲がるものがある。これらの27・33は胎土・焼成ともにきわめて良好で、調整も入念である。

〈胴部〉

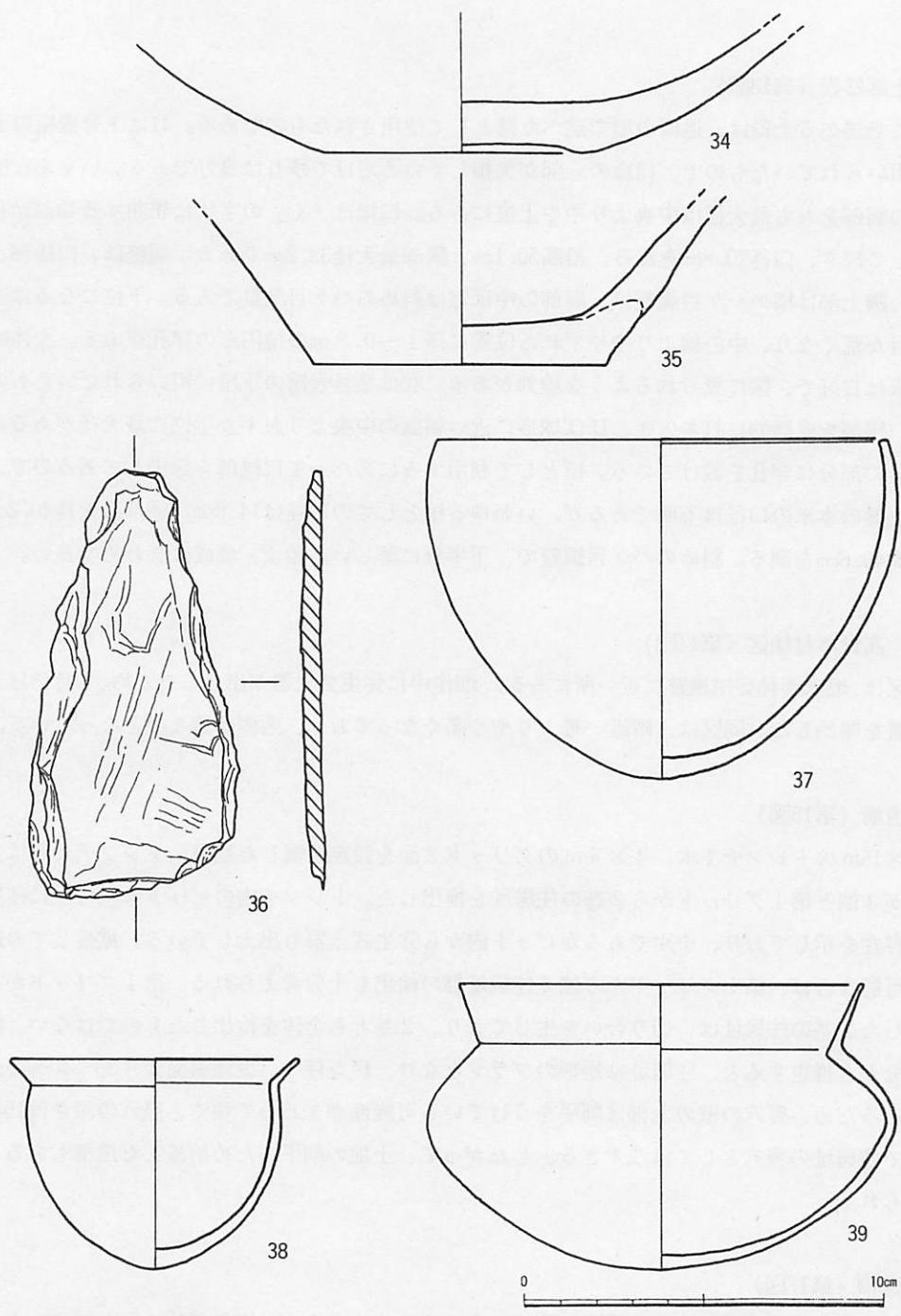
出土した多数の胴部片のうち、ここに記したものは文様のあるものである。2は沈線とハイガイの放射肋を押捺した擬似縄文による磨消文を施す。暗褐色を呈し、胎土に砂粒を多く含みもろい。4・11も2と同様の文様を施し、赤茶色を呈す。6・8は沈線のみで、両方ともヘラ磨き痕（暗文）が著しい。17は無文であるが大きく開く底部に続く部分で上端で「S」字状に屈折する。浅鉢の胴部であろう。

〈底部〉

34・35の2点である。35は平底で底径8cmを測る。開いて胴部へと続き、調整はナデである。34は浅い上げ底で大きく開いて胴部へと続く。底径7.4cmを測る。一部にヘラ磨きの痕跡がわずかに認められる。

○石器（第12図）

石器は36の一点で、この時期の土器に混じって普通に見られる扁平な緑色片麻岩製の石器で



(第12図 松坂原遺跡出土遺物・高野本村地区出土遺物)

34~36
37~39

ある。

○土師器壺（第13図）

ここで述べる土器は、遺構の項で述べた棺として使用されたものである。41は1号壺棺の下棺に用いられていたもので、口縁の一部が欠損しているだけで残りは良好である。いくぶん楕円状の胴部をもち最大径は中央よりやや上位にある。口縁は「く」の字状に屈曲する頸部から外傾して続き、口径20.8cmを測る。器高50.1cm、胴部最大径33.2cmである。調整は、口縁部、頸部、胴上部は横のハケ目調整で、胴部の中ほどは斜めのハケ目調整である。下位になるほどハケ目が荒くなり、中心線よりやや離れた位置に径1~0.8cmの楕円形の穿孔がある。全体的な出来は良好で、図に見られるような線刻がある。40は2号壺棺の下棺に用いられていたもので、口縁部を意識的に打ち欠き、ほぼ球形に近い胴部の中央よりわずか上位に最大径がある。最大径の部分に穿孔を設けている。棺として利用するにあたって口縁部を除去してあるので、この土器の本来の口径は不明であるが、いわゆる棺としての口径は14.8cm、胴部最大径40.2cm、残存高40.6cmを測る。斜めのハケ目調整で、下半分に著しい。胎土・焼成はきわめて良い。

5. 高野本村地区（第14図）

同区は、焼米柳林甕棺遺跡に近い所にある。畑作中に弥生式土器が出土したため、1月13日より調査を開始した。同区は、附近一帯よりやや高くなっている、西側は急な崖となっている。

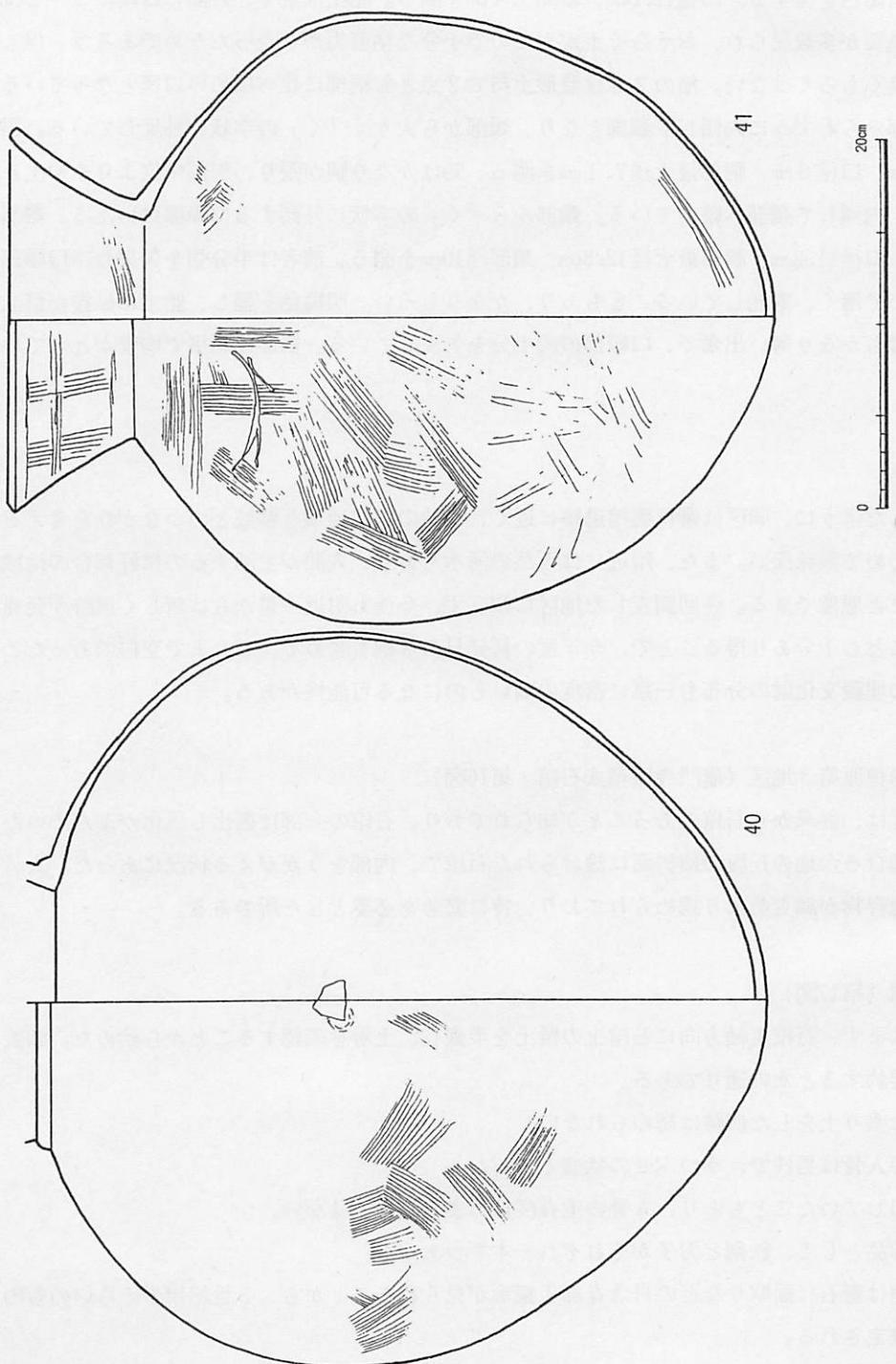
○遺構（第15図）

1×15mのトレンチ1本、4×4mのグリッド2面を設定開掘した結果、トレンチからはピットが3個と第1グリッドから2基の住居址を検出した。トレンチ内のピットは明らかに住居址の存在を示しており、小片であるがピット内から弥生式土器も出土している。拡張しての調査が可能ならば、第1グリッドから続く住居址群の検出も十分考えられる。第1グリッドから検出した2基の住居址は、切り合いを生じており、2基とも全体を検出したものではない。検出部分から推定すると、住居址は矩形のプランとなり、炉を伴う。現地表面から35~40cmの深さにあるため、竪穴の壁の上部は削平をうけている可能性がきわめて強く、竪穴の深さは15cmほどで住居址の竪穴としては浅すぎる。したがって、土地の削平のため消滅した遺構もあると考えられる。

○遺物（第12図）

トレンチ及びグリッドから土器の細片はかなり多く出土したが、図示可能なものはほとんどなかった。ここに記述するのは、3点でいずれもトレンチ内からの遺物である。1点はマリ形土

(第13図 松坂原遺跡出土・土師器壺図)



器で暗灰褐色を呈する。口径12.6cm、器高9.4cmを測る。胎土は荒く、外面には縦に1~2cmほどの亀裂が多数見られ、おそらく土がかためで十分な粘着力がなかったためであろう。但し焼成は良くもろくはない。他の2点は壺形土器で2点とも胴部に比べ広めの口径となっている。38は胴部からわずかに内傾して頸部となり、頸部から大きく「く」の字状に外反している。器高5.8cm、口径8cm、胴部最大径7.1cmを測る。39はかなり胴が張り、胴部中位よりやや上から大きく内傾して頸部へ続いている。頸部から「く」の字状に外傾する口縁部にいたる。器高7.9cm、口径11.2cm、胴部最大径12.8cm、頸部径10cmを測る。前者は半分強を欠失し、口縁部はきわめて薄く、磨耗していることもあり、かなりもろい。明褐色を呈し、胎土に砂粒が目立つ。後者もかなり薄い出来で、口縁部の約半分を欠失している。器形は扁平で均整がとれている。

◎小結

前述したように、同区は柳林甕棺遺跡に近く、当時の居住地域と墓域とのつながりを考える上できわめて興味深い。また、附近には天然の湧水もあり、人間が生活するのに好都合の地域であったと想像できる。今回調査した地区に限らず、今後も附近一帯からは新しく遺跡が発見されることも十分あり得ることで、今年度の新発見の2例も含めて、これまで空白であったこの一帯の埋蔵文化財の分布も一挙に密度の高いものになる可能性がある。

6. 赤穂原第3地区（竈門寺原箱式石棺・第16図）

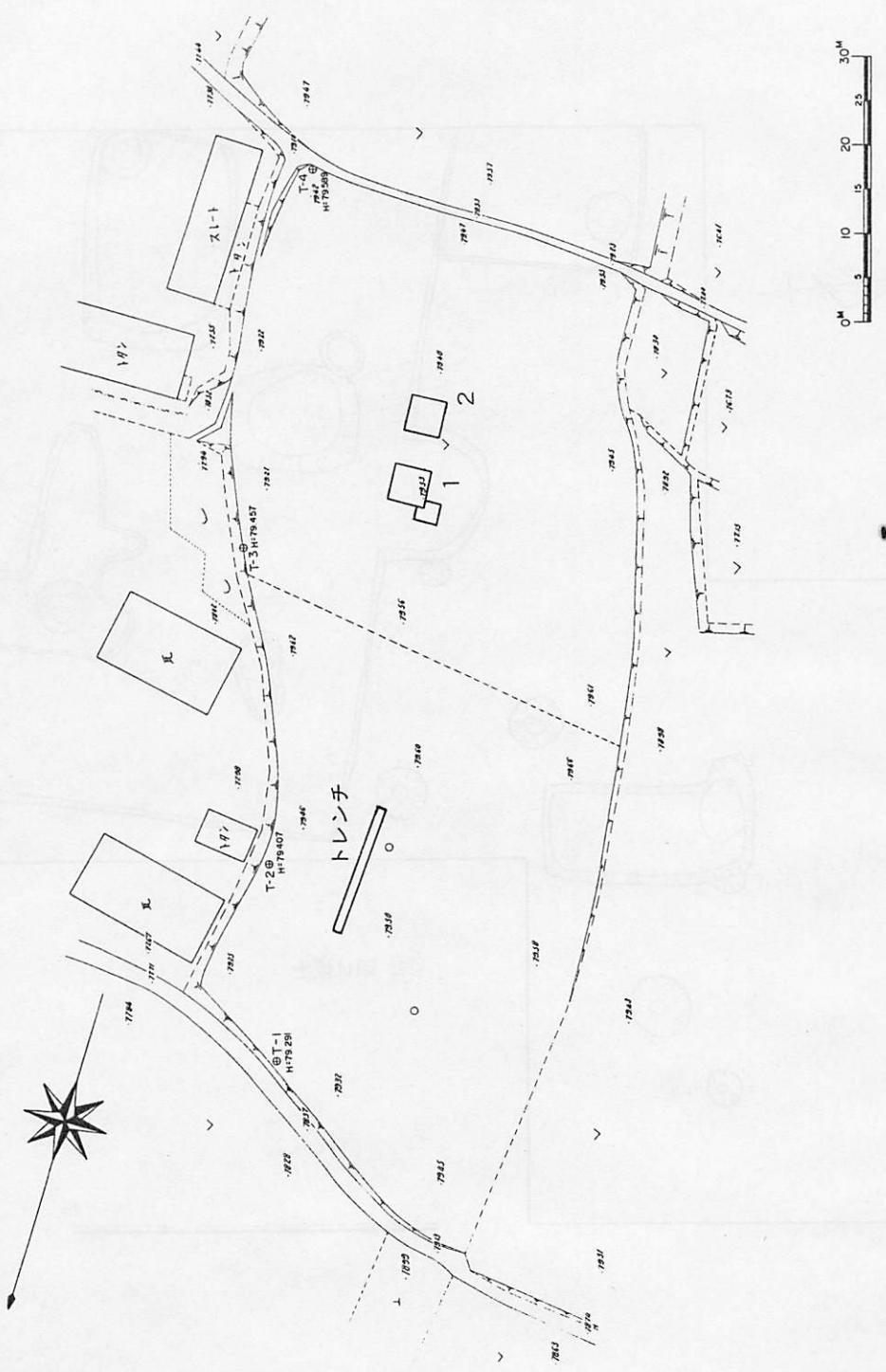
同地区は、従来から石棺のあることが知られており、石棺の一部は露出し風化が進んでいた。北西に延びる台地の丘腹の傾斜面に設けられた石棺で、内部をうかがえる状況にあった。人骨らしき遺存物が調査前より認められており、特に緊急を必要とした所である。

◎遺構（第17図）

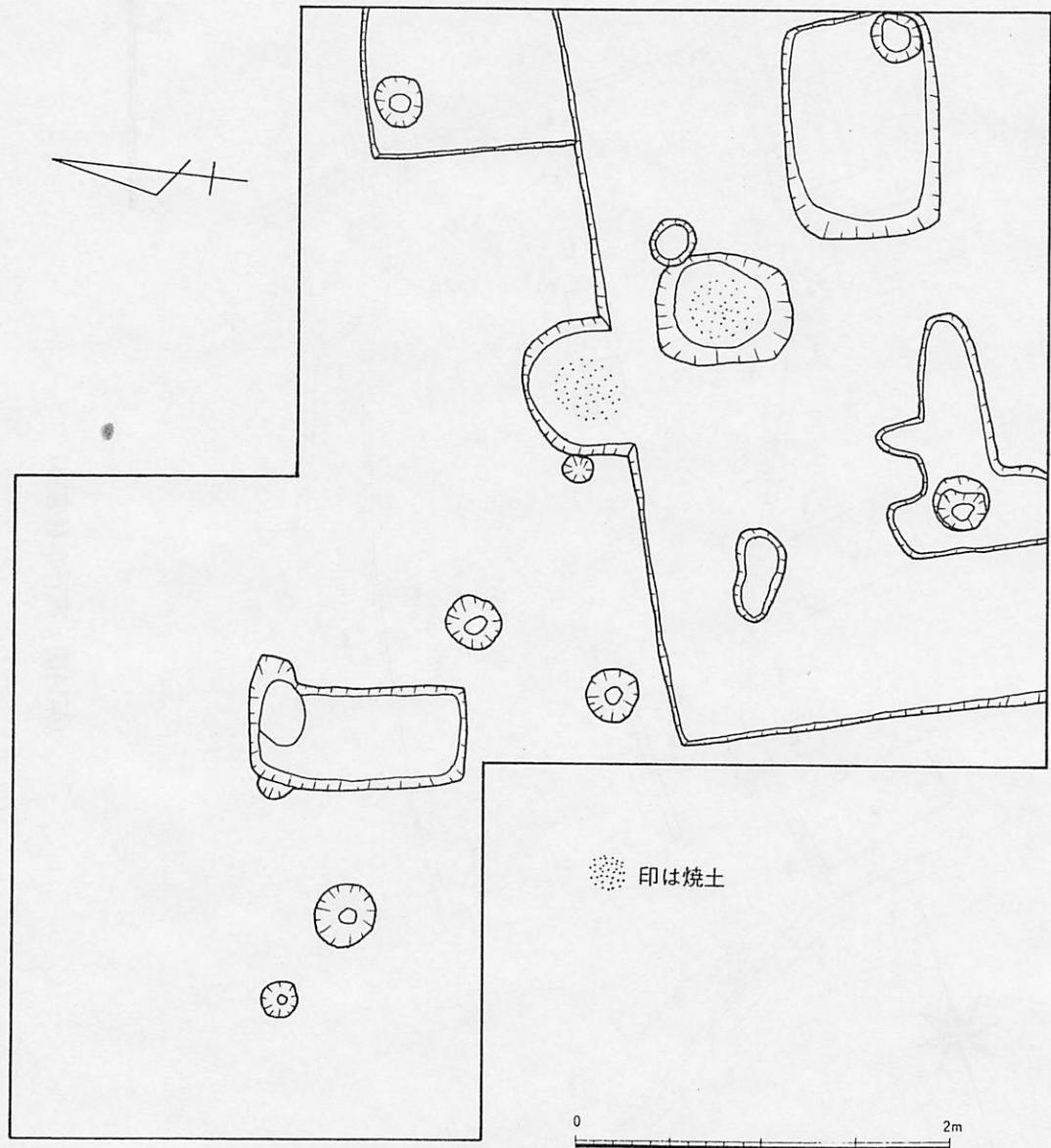
調査はまず、石棺主軸方向に石棺上の覆土を半截し、土層を確認することから始めた。調査結果を要約すると次の通りである。

- ①特に盛り土をした痕跡は認められない。
- ②埋葬人骨は男性で、うつぶせの状態であった。
- ③開口していたこともあり、人骨の遺存度はあまり良好ではない。
- ④副葬品として、鉄剣と刀子がそれぞれ一本ずつあった。
- ⑤石棺は蓋石に面取りなどの丹念な加工整形が見られたことから、5世紀後半くらいのものと推定される。

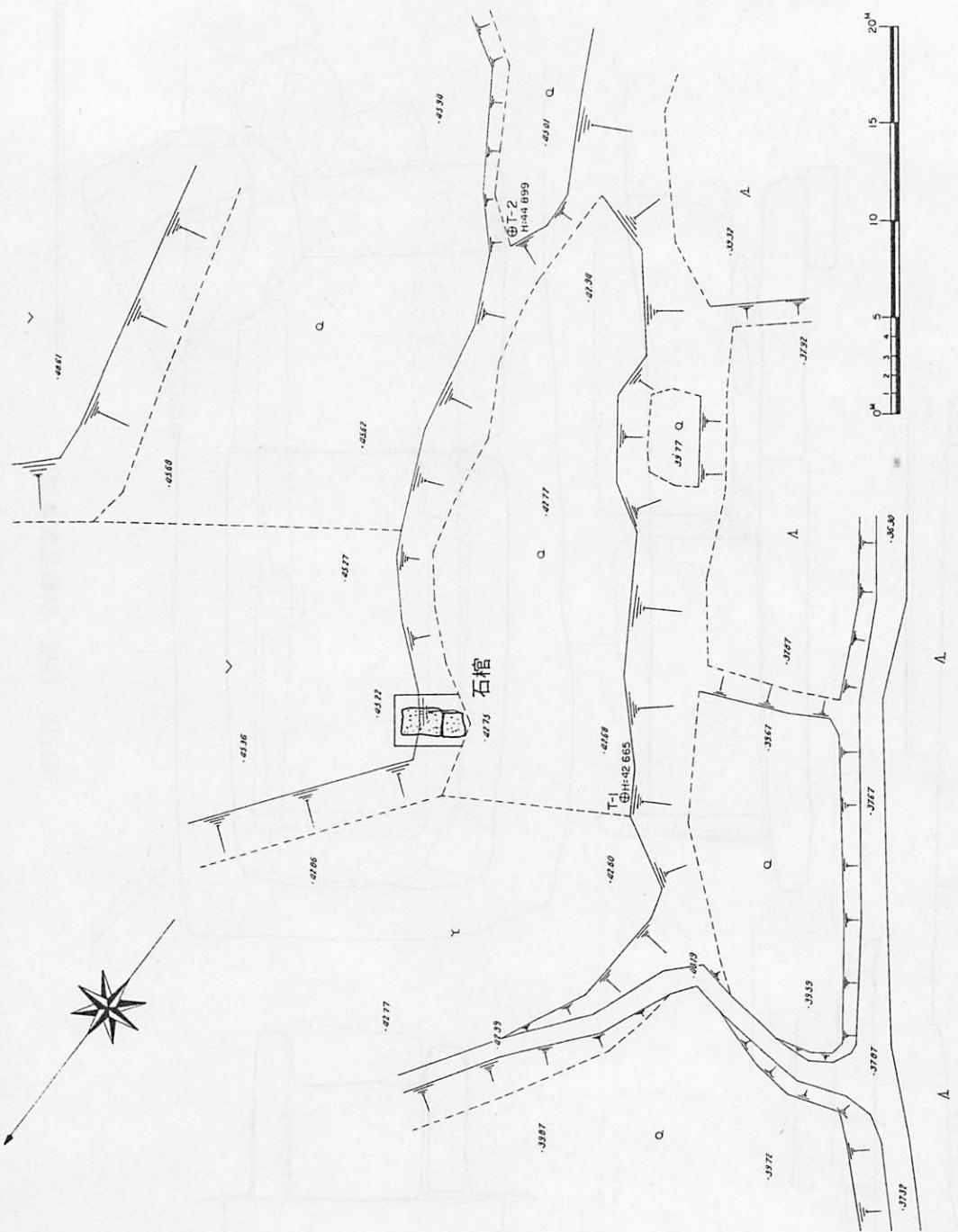
棺身は、主軸を北東~南西にとり、北東短側壁を1枚石、南西短側壁は消失、北西長側壁と



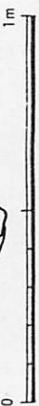
第14図 高野本村遺跡



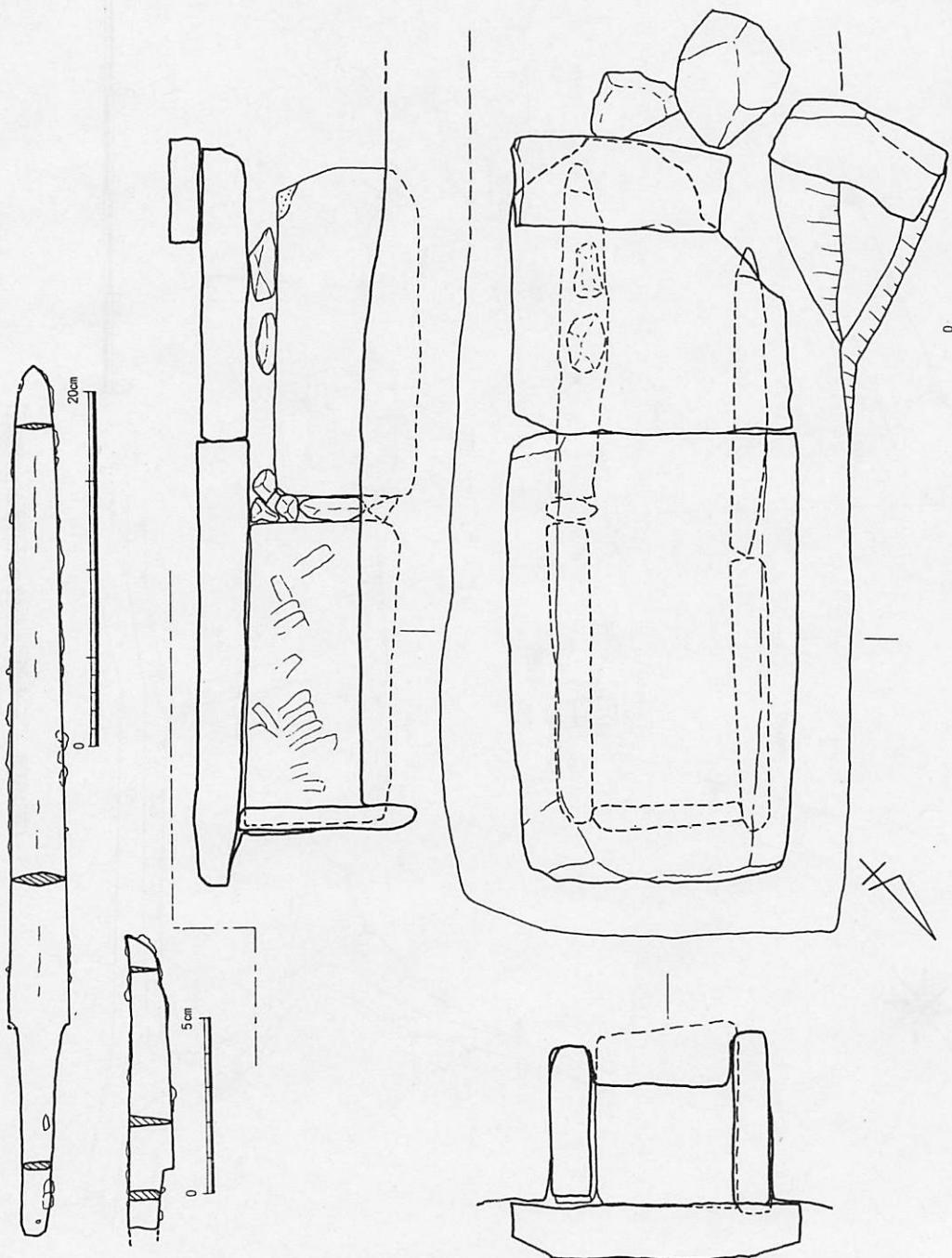
(第15図 第1グリッド平面図)



(第16図) 下津原北赤穂原石棺出土地区



(第17図 石棺・副葬品実測図)



南東長側壁は比較的大きな切石を各2枚並べた構成で、蓋石は2枚あり北東側に面取り整形を施したかなり大きい $141.5 \times 81\text{cm}$ の切石を用い、西西側には $82 \times 77\text{cm}$ の切石を用いている。南西側の蓋石の一端は破壊され不整五角形状を呈している。また南東長側壁の2枚の切石の接合部にはつめ石がなされていた。石棺床面内法は、長さ（残存長） 178cm 、幅（北東側） 44cm を測る。床は、粘土質の地盤をそのまま利用している。したがって、側壁を立てるための溝を掘り、地盤を利用した床面を整地し、側壁を立てたあと遺体を安置し、蓋石をかぶせたものと思われる。昭和55年度調査の下津原東上原石棺と比較すると、切石の面の調整など石棺全体からうける印象は、かなり精巧な作りと言える。

◎遺物（第17図）

副葬品として鉄剣と刀子が各1本ずつ出土した。両方とも、うつぶせた遺体の右手近くに、刃先を足元へ向けた状態で置かれていた。

○鉄剣

全長 48.8cm 、刀身長 36.9cm 、茎長 11.9cm 、刀身幅 3.1cm 、厚さ 0.4cm を測る。完形品である。

○刀子

全長 8.1cm 、茎長 1.7cm 、身幅 1.3cm を測る。茎の一部を欠失。

◎小結

前述のように、石棺の一部が開口していたため、人骨の遺存度は良好とは言えなかった。開口していたのは下肢側の短側壁の部分であったが、そこから、棒や竹などで内部を何度も攪乱したらしく、頭部は完全に壊されていた。又、小動物もかなり出入りしていたらしく、栗・ドングリの類が内部の堆積土の上に散乱していた。しかし、こうした状況下で鉄剣と刀子がほぼ原位置に保たれ原形をとどめていたのは、不幸中の幸いと言わねばなるまい。なお、人骨の出土状況、年齢、性別、身長などの詳細については、近日中に別報告の予定である。

この石棺調査の終了後、近くの杉林の中にある、かろうじて墳丘と呼べるほどの盛り土状小丘（土塊？）を調査した。結果は、盛り土による墳丘でなく、附近の崖が崩れ落ちてできた土塊であった。周辺からも出土遺物は皆無であった。

四、調査総括

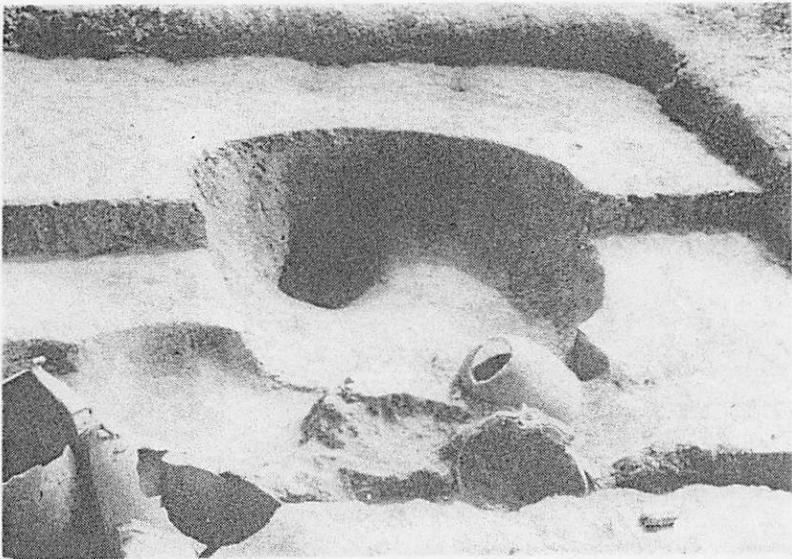
今年度の調査の中心地である赤穂原台地は、戦時に飛行場が設けられたり、最近の基盤整備などで、想像以上の攪乱をうけていた。しかし、広い台地の縁辺部には、まだ遺存度の良い部分もある。今年度の調査だけでは、遺物包含層の分布の全体像を十分に把握するに至らなか

った。むしろ、今年度の調査に限って言えば、関連調査として実施した地区のほうに多くの成果が得られた。例えば、これまで全くの埋蔵文化財空白地帯と思われていた焼米・高野地区に新しい二つの遺跡が確認されたことである。これらの発見で、周辺にはさらに多くの遺跡が眠っている可能性が示された。また、松坂原遺跡については、今まで縄文時代の遺跡という認識のもとで調査を推めてきたが、今回の壺棺墓の出土により、これまでも予想はある程度していたものの、縄文時代の遺物包含層の上に古墳時代の遺構が存在することが確実となった。附近には、今は消滅しているが姫塚古墳があり、この古墳は出土遺物から船山古墳よりも古い年代が与えられている。こうした既知古墳と、今回の壺棺墓の出土から考えると、この周辺にはまだ多くの古墳が、かつては存在したものと想像できる。

<終>

図 版

(写真の縮尺は不統一です。)

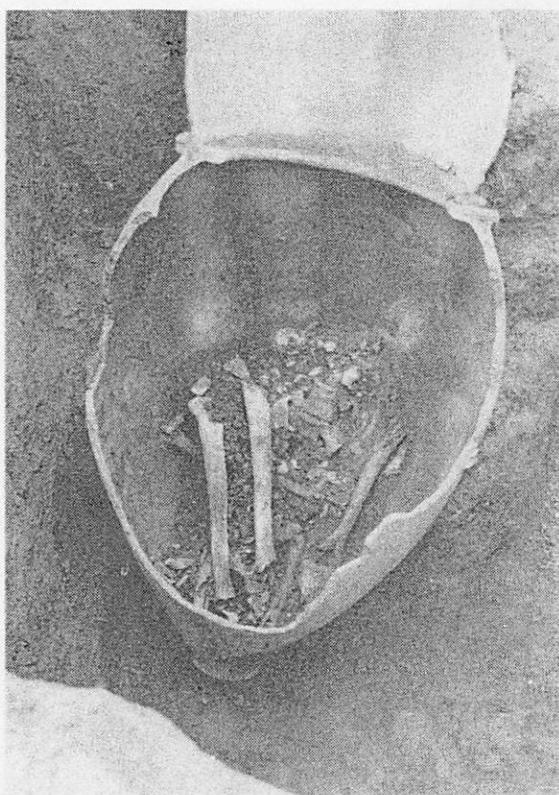


1号～4号甕棺出土状況写真

(上：北側から撮影、下：西側から撮影)

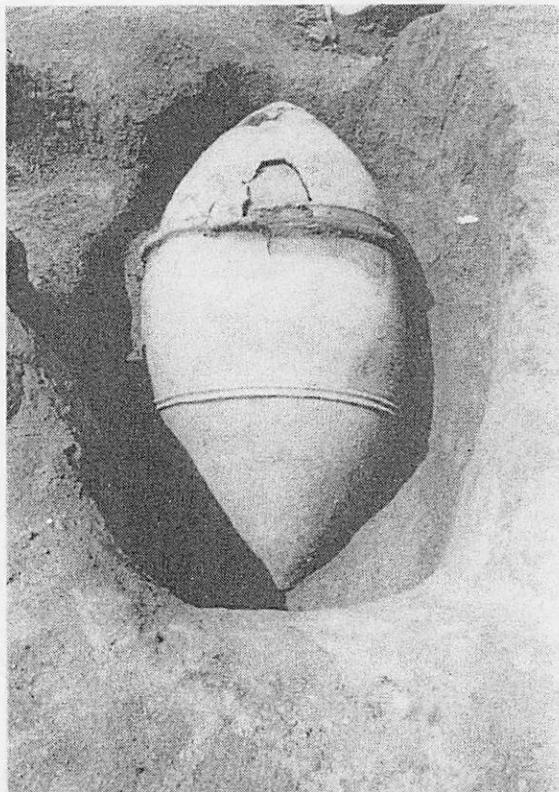


上：土塙断面写真
下：人骨出土状況



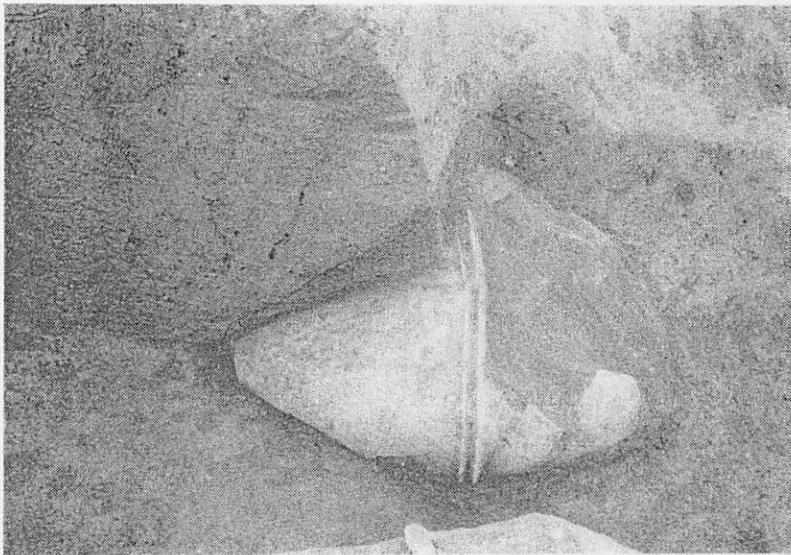
1号甕棺出土状況

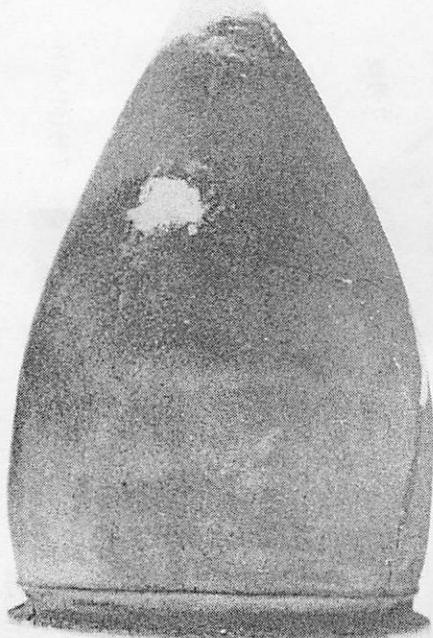
図版 3



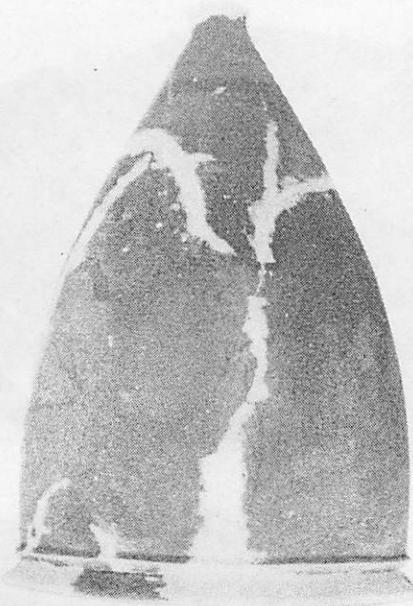
上：10号甕棺出土状況

下：11号甕棺出土状況

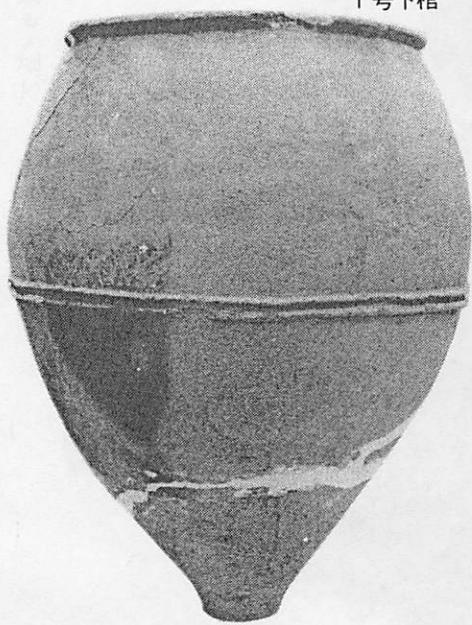




1号上棺



3号上棺



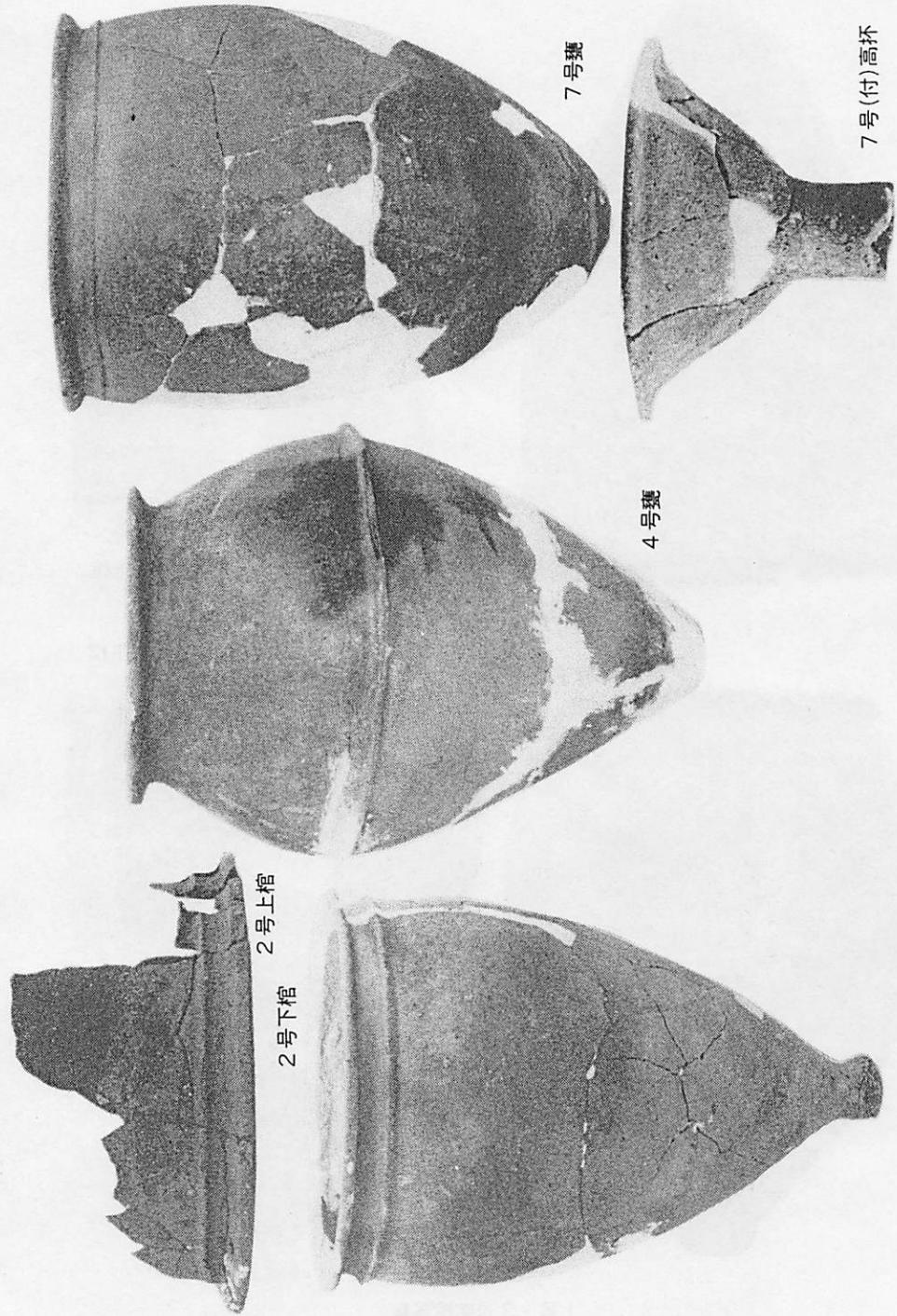
1号下棺



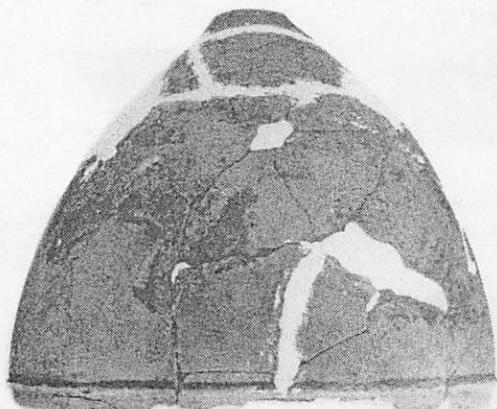
3号下棺

1号・3号甕棺写真

図版 5



2号・4号・7号甕棺写真



左上：10号上棺

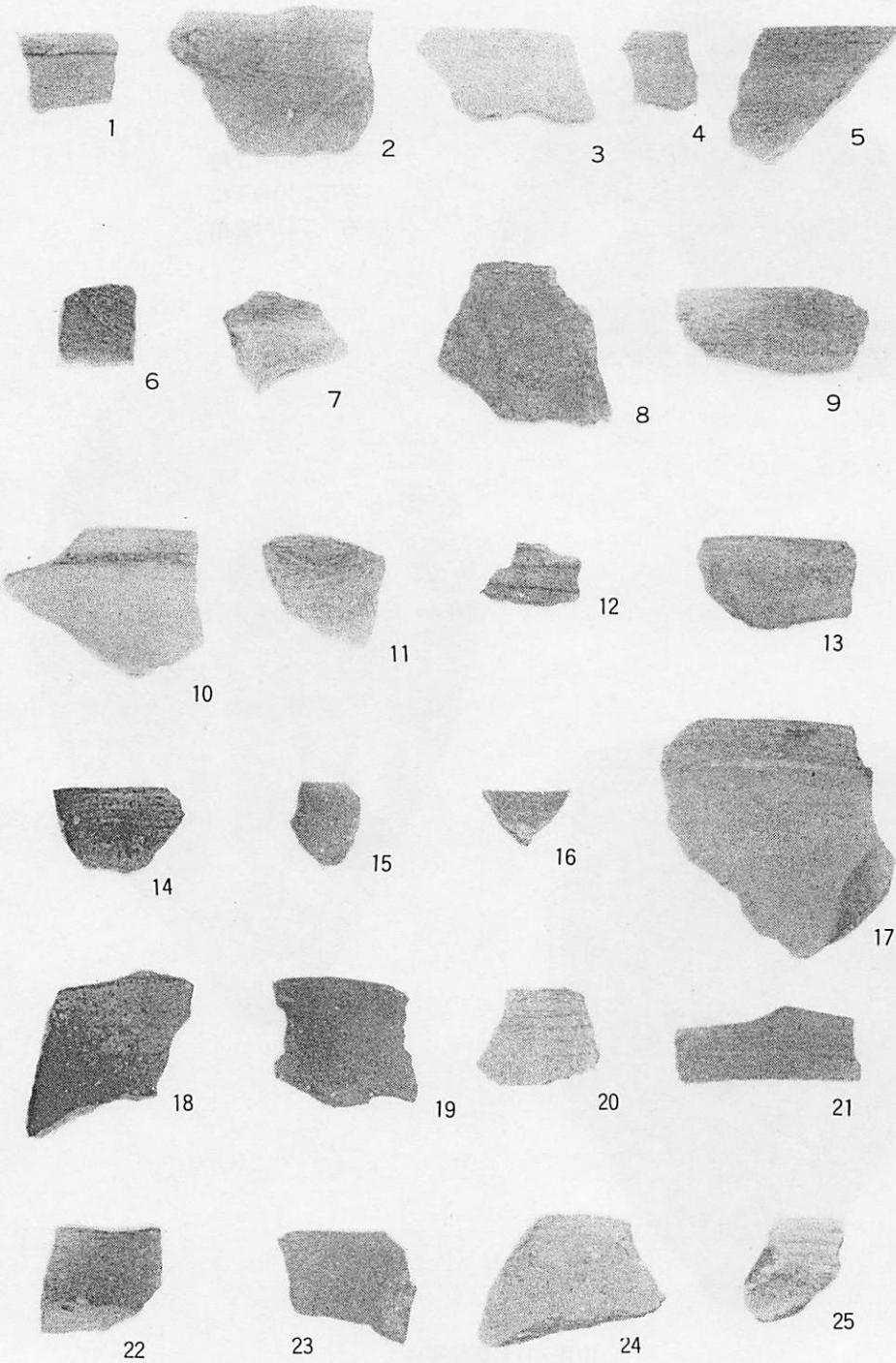
左下：10号下棺

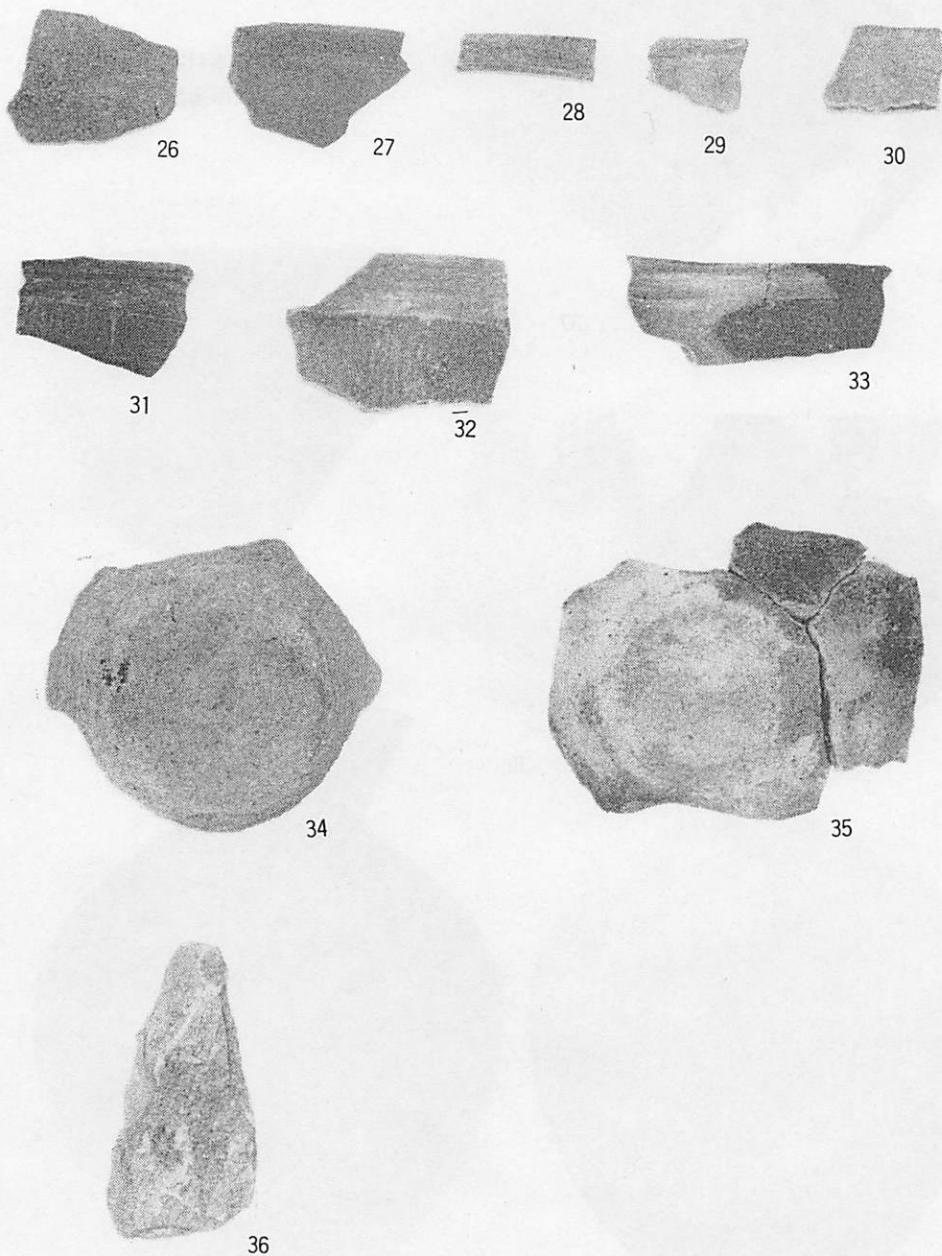
右：11号甕棺



10号・11号甕棺写真

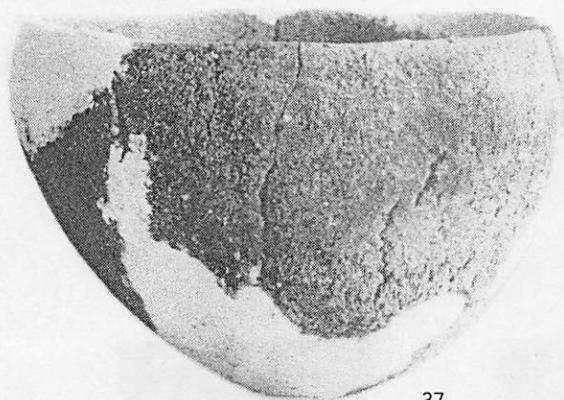
図版 7



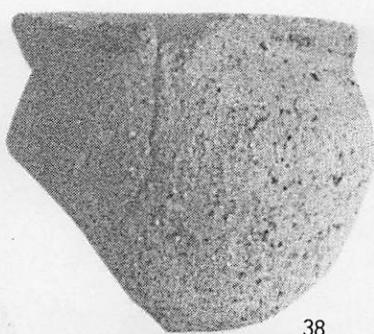


松坂原遺跡出土遺物写真

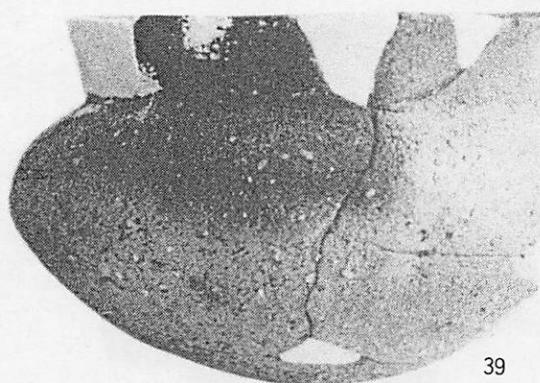
図版 9



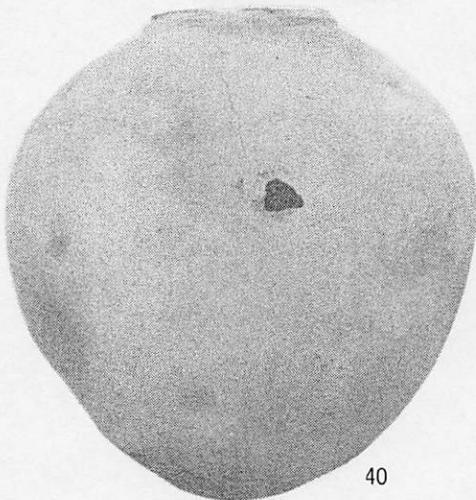
37



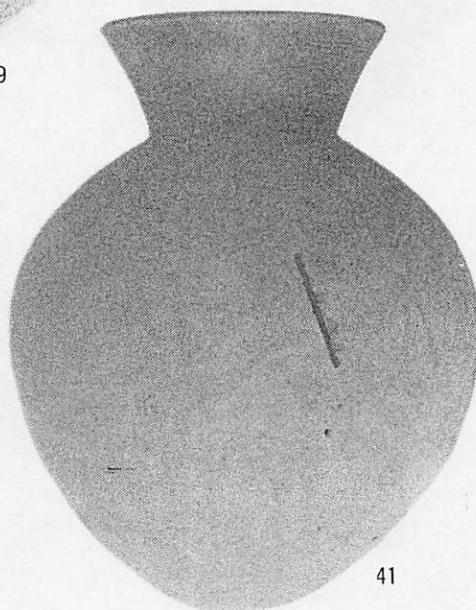
38



39

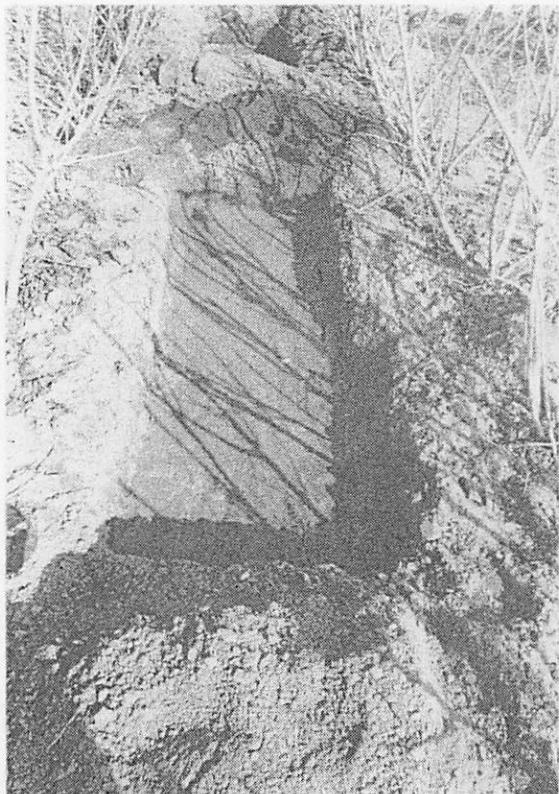


40



41

松坂原遺跡出土土器写真



上：赤穂原第1地区2トレンチ
下：赤穂原第2地区4グリッド



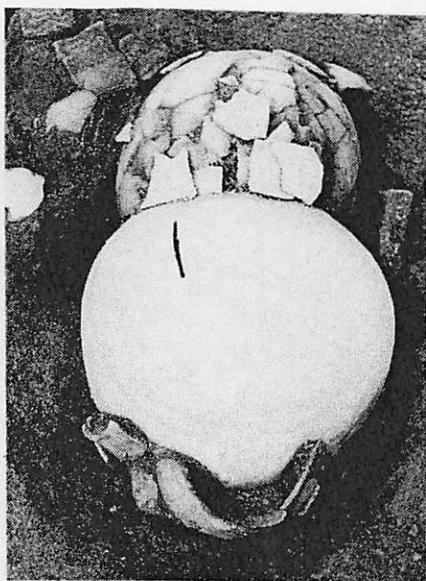
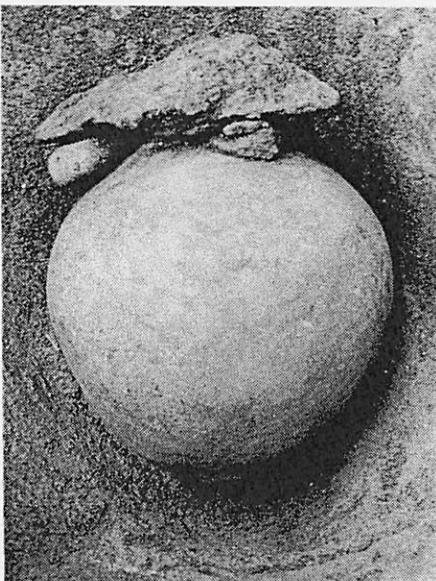
赤穂原地区調査写真



上：トレンチ内遺構遺物出土状況

下左：第2壺棺出土状況

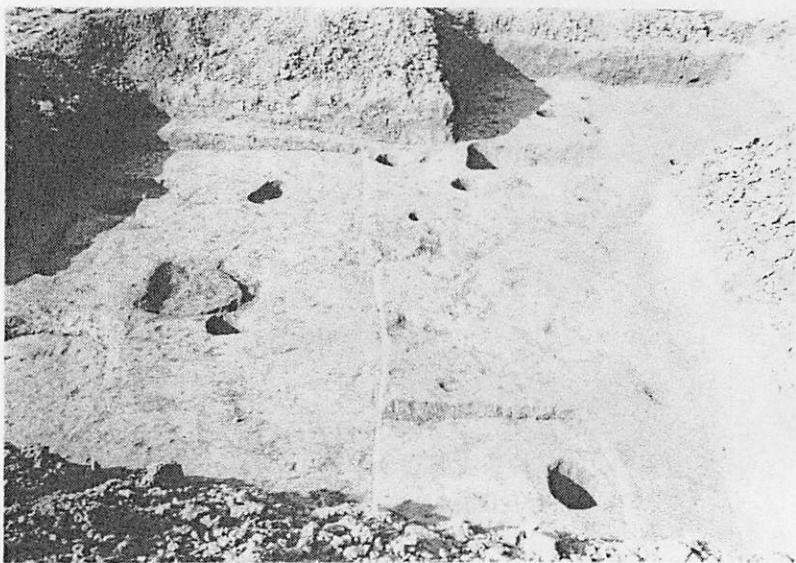
下右：第1壺棺出土状況



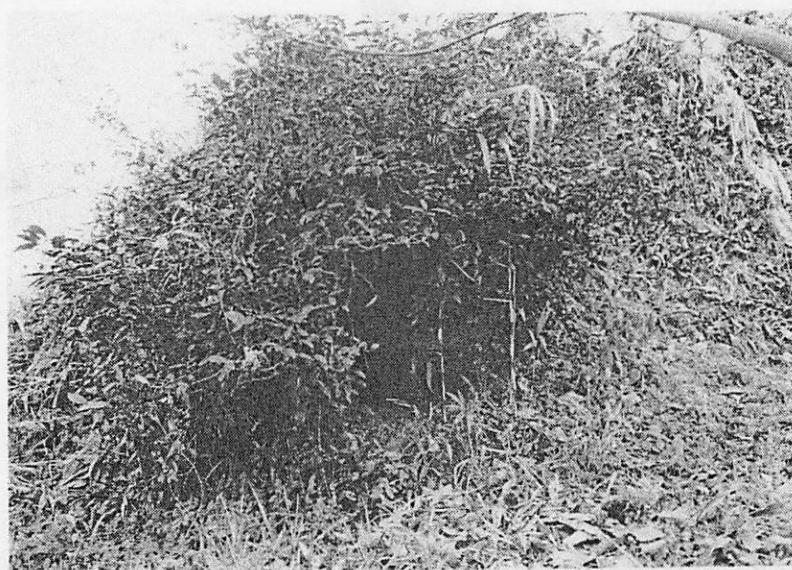
松坂原遺跡出土状況写真



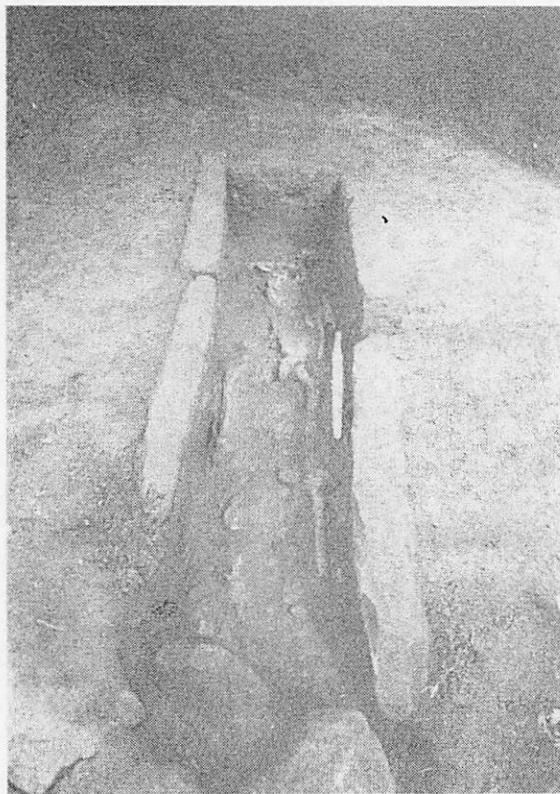
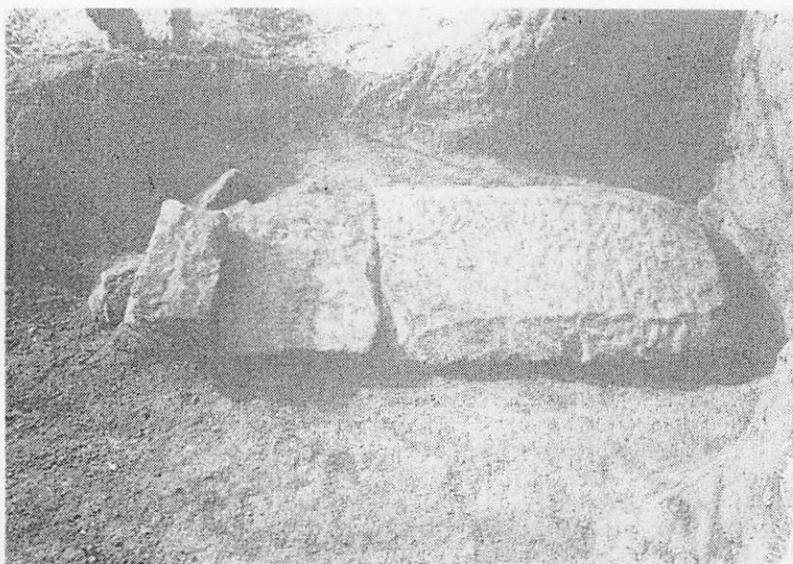
上：松坂原遺跡第1トレンチ層序写真
下：高野本村遺跡遺構出土状況



松坂原・高野本村遺跡調査写真



上：伐採前
下：伐採後



上：被覆土除去後
下：上蓋除去後

竈門寺原箱式石棺調査写真

菊水町文化財調査報告 第5集

赤 穂 原

昭和58年3月31日

編 集 菊水町教育委員会文化課

発 行 菊水町教育委員会
TEL. 096886-3131・3132

印 刷 城 北 印 刷